

生活者としての異世代理解を中心に据えた 家庭科カリキュラム開発に関する実践的研究

(研究課題番号 16530577)

平成16年度～平成17年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2))

研究成果報告書



平成18年3月

研究代表者 小川裕子

(静岡大学教育学部教授)

寄贈 小川裕子 (教育)

0006522338

生活者としての異世代理解を中心に据えた
家庭科カリキュラム開発に関する実践的研究

(研究課題番号 16530577)

平成16年度～平成17年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2))

研究成果報告書



平成18年3月

研究代表者 小川裕子

(静岡大学教育学部教授)

は し が き

平成 16,17 年度の 2 年間にわたって科学研究費の交付を受け、「生活者としての異世代理解を中心に据えた家庭科カリキュラム開発に関する実践的研究」を進めることができた。本研究は、平成 9,10 年度に、同様に科学研究費の交付によって進めた「高等学校家庭科住生活学習における高齢者を取り入れた地域教材の開発と授業研究」を、以下のように発展させたものである。それは、授業に高齢者という異世代との交流活動を取り入れたという点で、これまでの高齢者に関する実践とは質的に異なるものと考えている。筆者が初めて異世代交流活動を実践したのは、平成 14 年度の大学の自分自身の担当する授業に置いてである。大学の所在する小学校区の地区社会福祉推進協議会に依頼して、地域の高齢者の方々に大学の授業に参加して頂き、大学生と組んでグループになって食生活について考え、共同して一食分の献立を立てて調理し、試食する機会を設けた（研究発表・学会誌等 1）。続く平成 15 年度にも同様の実践を行った。その後、筆者自身、授業者として異世代交流活動を実施したという自信をもとに、平成 16 年から地元小学校の料理クラブの活動において、また、平成 17 年度には近隣の高等学校の家庭科の授業時間において、それぞれ、同地区社会福祉推進協議会の協力を得て異世代交流活動を実践することができた。

本科学研究費の交付によって、前述した平成 16,17 年度の小学校と高等学校での異世代交流活動を実践し、その意義について、小学生と高校生はもちろんのこと、高齢者の立場、交流会の支援に当たった大学生の立場からも明らかにすることができた。本報告書は、その中でも、平成 17 年度に行った近隣の高等学校の家庭科の授業において、「高齢者の生活と福祉」題材の導入時に異世代交流活動を実践した成果について、当時、筆者の指導の下で修士論文をまとめた久保田詔子さんとともにまとめたものである。これらの成果は、今後、日本家庭科教育学会（2006 年 7 月）、世代間交流国際フォーラム（2006 年 8 月）での口頭発表を経て、関連学会誌に投稿する予定である。

研 究 組 織

研究代表者：小川裕子（静岡大学教育学部教授）

（研究協力者：久保田詔子）

交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 16 年度	900,000	0	900,000
平成 17 年度	700,000	0	700,000
総 計	1600,000	0	1600,000

研究発表

(1) 学会誌等

小川裕子、「家庭科カリキュラムに関する実践的研究—大学生が食生活について地域の高齢者との交流を通して学んだことからの考察—」、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第 35 号、2004 年 3 月

小川正光、小川裕子「デンマークにおける『高齢者住宅』の住棟計画」、日本建築学会東海支部研究報告集、第 43 号、2005 年 2 月

小川裕子、吉原崇恵「学生の学びからみた『実践参加型授業』の意義と課題」、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第 37 号、2006 年 3 月

(2) 口頭発表

小川裕子、吉原崇恵「家庭科教員養成における実践参加型授業の試み」日本家庭科教育学会第 47 回大会、2004 年 7 月

小川裕子、吉原崇恵「教員養成における『教育実習』履修前後での『実践参加型授業』の意義」日本家庭科教育学会第 48 回大会、2005 年 7 月

小川裕子、久保田詔子、矢代哲子「『高齢者の生活と福祉』の学習に異世代交流活動を取り入れる意義に関する実践的研究」日本家庭科教育学会第 49 回大会、2006 年 7 月 1 日、発表予定

小川裕子、久保田詔子「高等学校家庭科『高齢者の生活と福祉』の学習に異世代交流活動を取り入れる意義に関する実践的研究」世代間交流国際フォーラム、2006 年 8 月 4 日、発表予定

(3) 出版物

家政教育講座（代表・小川裕子）『既存授業科目における実践参加型授業の試み—家庭科教員養成の場合—』平成 15 年度静岡大学大学活性化支援経費報告書、2004 年 3 月

小川裕子、吉原崇恵、大村知子、村上陽子、町井敏子『「家庭科内容指導論Ⅱ」の試行的授業実践』平成 16 年度静岡大学大学活性化支援経費報告書、2005 年 3 月

家政教育講座（代表・小川裕子）『家庭科教員養成コア・カリキュラムづくりを目指した実践的研究』研究報告書（静岡大学研究環境整備費）2006 年 3 月

目 次

第1章 本研究の目的・方法	1
第1節 本研究の目的	
第2節 本研究の方法	
註・引用文献、参考文献	
第2章 家庭科教師による既存の異世代交流活動実践の検討(略)	
第3章 異世代交流活動と題材「高齢者の生活と福祉」の概要	14
第1節 異世代交流活動の計画	
第2節 異世代交流活動の実施概要	
第3節 題材「高齢者の生活と福祉」の授業概要	
第4章 集団としてみた高校生の異世代交流活動による学習の深まり	24
第1節 高校生の高齢者との関わりの実態と交流活動前後の意識変化	
第2節 交流活動直後の感想文の記述概要	
第3節 観点別評価による「高齢者の生活と福祉」の学習の深まり・	
第5章 個人の変化からみた高校生の異世代交流活動による学習の深まり	51
第1節 目的と方法	
第2節 個人の変化から見る異世代交流活動による学習の深まり	
註・引用文献	
第6章 高齢者にとっての交流活動の意義	58
第1節 参加高齢者の実態と感想文等から見た交流活動の意義	
第2節 高齢者にとっての交流活動の意義	
第7章 結 論	67
註・引用文献、参考文献	

第1章 本研究の目的・方法

第1節 本研究の目的

1. 高等学校家庭科、選択必修科目における「高齢者の生活と福祉」

今日、「総合的な学習の時間」の創設や学校週5日制の開始により、どの教科も授業時間数が削減され、教科内容も厳選されるなど著しい変化がみられる。高校学校家庭科では、選択必修3科目のうちの1つとして、2単位の選択科目「家庭基礎」が登場した。

このような状況の中で、少子高齢社会の進展を反映して、家庭科の教科内容において、新たにとりあげられた内容がある。それは高齢者に関する学習内容である(図1参照)。大きくとりあげられるようになったのが、1989(平成元)年版高等学校学習指導要領である。

「高齢者の生活と福祉」に関する学習は、その前の1978(昭和53)年版には全く含まれていなかったのに対して、1989年版には図1に示すように節レベルで取り上げられ、注目された。さらに1999(平成11)年版では、前述したような時間数削減の中で、必修選択科目の1つ「家庭総合」(4単位)において、「高齢者の生活と福祉」は1つの章として位置づけられた¹⁾²⁾³⁾。

しかしながら、90年代の「高齢者の生活と福祉」に関する授業実践報告をみると、生徒が高齢者と接触する経験が少なくなってきたこと、生徒自身が老化を実感しにくいことなど、指導上の困難が多々あることが指摘されている。それは、教科書を通して、高齢者について知識として理解できても、生徒が自分の問題として把握しにくいということである。また教科書の内容も高齢期の生活課題として高齢者のみの世帯が増加していることや、年金や介護など社会的負担となる面に重点が置かれている。中でも介護の問題は、「元気な高校生にとって実感に乏しく、また将来生活への希望を失わせる面がある」⁴⁾という指摘もあった。

高等学校家庭科高齢者関連の学習において、大塚⁵⁾は、1989(平成元)年版の学習指導要領にもとづく教科書(家庭一般、生活一般)における高齢者の取扱いについて、高齢者の福祉や、経済生活に関する記述が充実しているものの、高齢者の生きがいについては、ほとんどふれていないため、高齢者の生活の物質面をカバーしても、精神面にまでは、まだ十分行き届いていないと指摘している。高齢者の精神的面である高齢者の生きがいや役割をどう扱っていくのか検討する必要があると考えられる。

渡瀬⁶⁾は、科目の発足時1956年から1997年までの「家庭一般」の教科書を1982年の発足後1997年までの「現代社会」の教科書と比較し、学習目的や教科書に現れる高齢者観について考察を行っている。その結果、高齢者についての学習を家庭科でとりあげる上での今後の課題は、社会と家庭、地域と社会の関係のあり方の問い直しであるとした。そして「家庭一般」では家族、個人の立場からのアプローチを徹底する方向で独自性が発揮されると指摘している。そのため、高齢社会の中での家庭、地域社会で高校生ができることは何か、自分の将来にある高齢期をどのように生きるかという生徒にとって身近な部分の学

習展開について検討が必要である。さらに渡瀬⁷⁾は、80年代後半から90年代にかけて発行された高齢者関連学習の内容を扱う諸科目の日米の高等学校教科書を比較し、日本の教科書では「加齢によって生じると考えられたネガティブな生体変化は加齢だけが原因ではない」という記述がアメリカの教科書よりやや少なく、加齢に対する偏見について日本の教科書が触れる必要があるとした。そして渡瀬は「現代社会」の教科書との比較、アメリカの教科書との比較から、高等学校家庭科における高齢者関連学習の目的を「快適な高齢期の創造・追及」であると提案している。高齢者の自立、QOL（衣食住を含む）、家族の扶養、社会サービス、近隣との関わりといった、個人・家族・社会と高齢者の関係から、高齢者の人権、生涯発達に関する事柄を含めた展開の検討が必要だとしている。

表1-1-1 高等学校学習指導要領「家庭」、選択必修科目「家庭一般」「家庭総合」の章、節構成

1978 (昭和 53) 年 家庭一般 (4 単位)	1989 (平成元) 年 家庭一般 (4 単位)	1999 (平成 11) 年 家庭総合 (4 単位)
(1) 家庭生活の設計・家族 ア 家庭の機能と家族関係 イ 生活時間と労力 ウ 家庭の経済 エ 生活設計	(1) 家族と家庭生活 ア 家庭の機能と家族関係 イ 家族の生活と家庭経営 ウ 生活設計 エ <u>高齢者の生活と福祉</u>	(1) 人の一生と家族・家庭 (2) 子どもの発達と保育・福祉 (3) <u>高齢者の生活と福祉</u> ア 高齢者の心身の特徴と生活 イ 高齢者の福祉 ウ 高齢者の介護の基礎
(2) 衣生活の設計・被服製作	(2) 家庭経済と消費	(4) 生活の科学と文化
(3) 食生活の設計・調理	(3) 衣生活の設計と被服製作	(5) 消費生活と資源・環境
(4) 住生活の設計・住居の管理	(4) 食生活の設計と調理	(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動
(5) 母性の健康・乳幼児の保育	(5) 住生活の設計と住居の管理	
(6) ホームプロジェクト・学校家庭クラブ	(6) 乳幼児の保育と親の役割	
	(7) ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ活動	

2. 高齢社会における福祉教育

高齢社会の進展については、「高齢社会白書」(2004年版)によると⁸⁾、65歳以上の高齢者の人口は、2003年10月の時点で2431万人、そのうち男性は1026万人で初めて1000万人を超えたとしている。100歳以上の人口も2003年9月現在で2万人を突破し、5年間で倍増した。総人口に占める高齢者の割合は19%、2050年には35.7%に達すると見込んでいる。また内閣府による2003年度の「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」では⁹⁾、60歳以上の高齢者に近隣住民との交流について聞いたところ、「家族以外の若い世代との交流の機会がない」と答えた人が53.8%を占めたとしている。交流がある人の相手は「壮

年の世代」が67.8%と最も多く「中・高校生の世代」は13.5%である。近所付き合いについても「親しくつきあっている」が52.0%「挨拶する程度」が40.9%「つきあいはほとんどしていない」は7.1%である。前回の1997年度の調査よりも「親しくつきあっている」は減少、「挨拶する程度」「つきあいはほとんどしていない」は増加傾向にあり、世代間や近隣住民との交流は希薄になっている。一方でスポーツや趣味などのグループ活動に参加したことがある人は54.8%となり、高齢者同士の交流は広がっている。若い世代との交流については「参加したい」と答えた人も52.7%であり、世代間交流推進の必要条件については、「交流機会の設定」26%と最も高くなっているため、交流の機会を設定することが求められている。

家族の形態も変化し、「高齢社会白書」（平成16年版）によると、2002年の時点で、65歳以上の高齢者のいる世帯は全世帯の36.6%で、そのうち単独世帯が20.2%と初めて20%を超え、三世帯世帯は23.7%となり、1980年の50.1%の半分以下になっている。若い世代と高齢者が同居している世帯は減少し、日常生活で高校生と高齢者と関わることも少なくなっているといえる。

児童・生徒の高齢者との関わりの実態について、「小学生」「中学生」「高校生」を対象に調査した内閣府による1998年度の「児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査」¹⁰によると、祖父母との接触頻度についてみると、「ほとんど毎日会う」が33.2%と最も高く、次いで「年に数回会う」（24.5%）、「月に1～2回会う」（19.0%）などの順となっている。「年に数回会う」の割合は、高校生で最も高くなっている。

高齢者との交流の経験については、「電車やバスで、お年寄りに席をゆずったり、街でお年寄りの手を引いたり、荷物をもってあげたことがある」が47.8%と最も高く、次いで「老人ホームに行ったり、学校にお年寄りに来てもらったりしたことがある」45.1%となっている。「その他にも、お年寄りと一緒にしたことがある」36.6%「身体の不自由な祖父母の世話をしたことがある」19.8%「したことがない」16.9%の順となっている。学校種別に見ると「電車やバスで、お年寄りに席をゆずったり、街でお年寄りの手を引いたり、荷物をもってあげたことがある」「老人ホームに行ったり、学校にお年寄りに来てもらったりしたことがある」「身体の不自由な祖父母の世話をしたことがある」で高校生の割合が高く、「その他にも、お年寄りと一緒にしたことがある」では小学生の割合が高く、高校生は最も低い割合となっている。高校生は、小・中学生と比べ、街で偶然会った高齢者や施設に訪問した時に会った高齢者など一時的な関わりはあるが、高齢者と一緒に何かをするなど継続的に関わるのが少ないことが分かる。

高齢者との交流への参加意識をみると、「できる限り参加したい」が57.9%と最も高く、次いで「あまり参加したくない」26.5%「積極的に参加したい」10.8%「全く参加したくない」3.9%の順となっており、参加意欲のある人の割合は68.7%となっている。学校種別に見ると「できる限り参加したい」の割合が各々最も高く、次いで小学生では、「積極的に参加したい」、中学・高校生では「あまり参加したくない」の順になっている。小学生に比

べ、中学・高校生では、参加意欲が低いことが分かる。高齢者との交流へ「あまり参加したくない」、「全く参加したくない」と回答した生徒の参加したくない理由をみると、「勉強や部活動、遊び等が忙しく、暇がないから」が37.2%と最も高く、次いで「お年寄りとは話が合わないと思うから」37.0%となっている。高校生を注目すると、「勉強や部活動、遊びで忙しく、暇がないから」が36.7%、次いで「お年寄りとは話が合わないと思うから」が31.5%、「お年寄りとは活動のペースが合わないと思うから」が25.6%となっている。高齢者との交流を促進するための必要条件をみると、「交流の機会を作る」が67.4%と最も高く、次いで「お年寄りが参加しやすくするために、お年寄りに配慮した交通機関の整備」47.0%となっている。「交流の機会を作る」については、高校生の場合には68.5%と最も高くなっている。高齢者との交流に参加する意欲があるものの高齢者との交流の機会がないことが分かる。同時に、高齢者との交流に意欲のない高校生の存在も無視できない。

中央教育審議会第2次答申(1997)では、高齢社会に対応する教育の在り方について、基本的な考え方として以下の3点をあげている¹¹⁾。1つは子どもたちが高齢者だけでなく、社会的な弱者などを含めて、自分自身と異なる立場や考え方などが異なる人間と、共に生きていくという考え方をしっかり持ち、高齢社会がどのような社会かを学びつつ、実際に地域社会や高齢者のために主体的に行動し、高齢者とともに豊かな社会を築いていく意欲や実践的態度を育むこと、2つ目に子どもたちが長寿化する社会の中で、生涯にわたって学んでいく態度や生涯にわたり心身ともに健康な生活を送るための基礎的な健康や体力を育んでいくこと、3つ目に長年培ってきた豊かな経験と知識を有する元気な高齢者が、子どもたちの教育という営みに積極的に参加していくことは、子どもたちが高齢者から様々な生きた知識や人間の生き方を学んでいくことを可能とするものであるということである。さらに、子どもたちに豊かな人間性を育んだり、地域社会や高齢者のために主体的に行動する意欲や実践的態度を育むためには、子どもたちに対し、高齢社会の問題を知識として教えるだけでなく、子どもたちが、自ら実際に高齢者と触れ合いながら様々な体験をする中で学んでいくことが極めて有意義だとしている。

1999(平成11)年高等学校学習指導要領総則では教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項として「開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、高等学校間や中学校、盲学校、聾(ろう)学校及び養護学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒や高齢者などとの交流の機会を設けること。」とした。これらは、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領においても同様である。さらに新設された総合的な学習の時間については、学習内容の例の1つに福祉をあげている。

高等学校家庭科の中で「家庭基礎」では、題材「高齢者の生活と福祉」の中で「高齢者の心身の特徴と生活、高齢者の福祉などについて理解させ、高齢者の自立生活を支えるために家族や地域及び社会の果たす役割について認識させること」とし、さらに内容の取り扱いでは、「学校や地域の実態等に応じて、学校家庭クラブ活動等との関連を図り、福祉施

設等の見学やボランティア活動への参加をはじめ、身近な高齢者との交流の機会をもつよう努めること」としている。「家庭総合」「生活技術」でも同じように交流機会を設けることが示されている。

さて、本研究で取り上げた家庭科の「高齢者の生活と福祉」についての学習は、福祉教育の1つという捉え方も可能である。1970年頃から研究が進んでいる福祉教育の成果に学ぶならば、その学習方法として、「社会福祉問題の緩和・解決をめざして、その学習と個々の住民の日常的な生活とを有機的に融合させるために、『福祉体験学習（福祉体験活動）』が重視され¹²⁾ 不可欠と考えられている。家庭科の学習の中でも、事実や実態をつかみ意識化し、他人事で終わらせないために、高齢者と関わる体験が有効であると考え。ただし、どのような体験活動を行うのかについては、慎重に検討しなければならない。

福祉教育実践の今日的課題として原田¹³⁾ は福祉教育実践の3大プログラムとして「疑似体験」「技術講習」「施設慰問」をあげ、それぞれの問題点を指摘している。まず「疑似体験」はネガティブな側面を体験するにすぎず、大変だ、かわいそうだという一方的な視点からでは高齢者や障害のある人に対して嫌悪感が増長され「尊厳」は育まれないとしている。また点字や手話などの「技術講習」についても単なる技術としてではなくコミュニケーションとして理解することが求められる。障害のある人の存在や生活の有り様を知り、生き方を学びながら自分と他者との関わりを学ぶ姿勢が必要とされる。車いすの介助の仕方も同様である。さらに「施設慰問」は、子どもたちが出し物を披露し、プレゼントを届けるという一方的なプログラムに陥っていて、施設の利用者から学ぶという視点が欠落していると指摘している。さらに福祉教育実践のクオリティーを高めていくために10の提案をしている。①目的やねらいを共有すること②「対象理解」から「主体形成」の視点へ③「振り返り」と「分かち合い」を大切にすること④公開研究授業を開催すること⑤「ボランティア」と「地域貢献」を区別すること⑥地域福祉実践のなかの「学び」を大切にすること⑦「受け入れ施設」から「働きかける施設へ」⑧「貸し出し社協」から「企画・コーディネート型社協」へ⑨財源をつくりだしていくこと⑩福祉教育実践は「共同実践」で展開すること。これらは、これからの福祉体験学習を考える際に有効な示唆を与えてくれる。

河村¹⁴⁾ は、家庭科教育における福祉教育実践事例について検討をした結果、高等学校では高齢者に関連する体験学習が多く取り入れられていることを明らかにした。さらに体験学習の課題として、触れ合いのある体験は、交流そのものが目標とされている実践が多く、学習者が福祉に関わる問題を自分のこととしてとらえるには至っていないことをあげている。また、ふれあい体験がない疑似体験については、かえって画一的な高齢者観を再生産する恐れがあるとしている。そして家庭科における福祉教育実践の方向性として、他者との関係性を重視しながら、身近にある社会福祉問題を生活に密着させて考え、課題解決的に取り組むこととしている。

3. 本研究の目的

本研究では、高校学校家庭科における題材「高齢者の生活と福祉」の学習の中に関わらせて異世代である高齢者との交流活動を独自に企画し、実施する。そして、そのような異世代交流活動を行うことが、「高齢者の生活と福祉」を学習する高校生にとって、また高齢者にとって、どのような意義があるのかについて明らかにすることを目的とする。

本研究で実施する異世代交流活動の特徴は以下の通りである。

① 異世代交流活動の学習活動の中での位置づけ

異世代交流活動について交流活動すること自体が目的とならないように、家庭科の「高齢者の生活と福祉」の学習に関わらせて実施する。

② 交流相手

交流活動の相手は地域で活躍する元気な高齢者とする。また異世代交流活動の意義については、高齢者のみならず高齢者にとっても、どういう意味があったかに注目する。

③ 交流活動の内容

交流活動の内容は、あらかじめ定めることはせず、参加できる高齢者が決定した後に、生活文化¹⁵⁾に関わることで高齢者が得意とすることの中から決定してもらい、それらについて高校生が教えてもらって作るという活動とする。また交流活動は2回行い、交流が深まるようにする。

第2節 本研究の方法

1. 本研究でおこなう異世代交流活動

家庭や地域で高齢者と接する機会が減少している中で、学校における高齢者との交流が行われるようになってきた。それらは老人ホーム等で高齢者と交流することが主流である。しかし、老人ホームは、特別養護老人ホームが中心であることから、要介護の高齢者との交流がほとんどである。

笹島・神川・永井・浦上¹⁶⁾は、シニア体験や高齢者施設訪問、児童福祉施設訪問という体験学習を通して、児童・生徒は他者理解を深め、他者との交流を通して自己をも見つめることができたという。そして直接体験の乏しい現代の子どもたちにとって、体験学習は他者を理解し、思いやる心を伸ばし育てる有効な手だてとなるとしている。しかし交流がその場限りで終わってしまわないように、体験学習後の振り返りの場や体験学習と理論学習の系統性を構築することが重要である。また、高齢者施設訪問において介護の必要な高齢者と交流したことで、高齢者に対してマイナスイメージを持ったり、高齢者と関わりをもちたくないと感じる生徒もいて、その支援や援助の方法が問題となることを明らかにしている。

荒井・神川・渡辺¹⁷⁾によると、福祉・高齢者観や学習への関心・意欲が積極的である背景要因として、小・中・高校生の各段階において、生徒の生活自立度、生徒の地域活動への参加度、地域の高齢者との接触度、学習経験との関連を明らかにしている。生徒が実際に高齢者と接して理解を深め、問題を自ら発見し、学んでいける学習機会が不可欠としている。そして中・高校生は、家庭や地域における活動が不活発で高齢者観も消極的であり、学年があがるにつれて福祉・高齢者学習への意欲も低下する傾向にある。しかし人間関係の学習に対しては多くの生徒が関心を示している。そのため福祉・高齢者の学習として、高校生自身や自分の取り巻く身近な人々と関わらせて課題を設定したり、実際に地域で高齢者とふれあいながら学習を体験的に進めることが関心・意欲を喚起するのではないかと考察している。

交流相手となる施設の側の問題として、老人ホーム等入所施設で体験を行う場合、施設は入居者にとって生活の場であること等の問題がある。そして90年代には、高齢者のための通所施設は少なく、学校の近くには、ほとんどない状態にあった。しかし2000年の介護保険制度の導入により、入所施設とともに、デイサービスセンター等の通所施設が急激に増加している。同時に地域住民による互助組織の整備が進み、例えば、小学校区単位で地区社会福祉協議会が作られるなど、学校と高齢者との交流が行いやすい環境が整いつつある。

以上のように先行研究や今日の高齢者向けの施設等の実態に関して検討した結果、交流相手について、本研究では、老人ホーム等の福祉施設で生活する介護の必要な高齢者ではなく、地域で生活している自立した高齢者とする事とした。

次に交流を行うにあたり、高齢者とどのように交流するかという交流の内容の問題がある。山川・倉森¹⁸⁾は、高齢者に対して肯定的イメージをもつほど、高齢者への学習意欲・関心は高いとした。さらに、肯定的イメージをもつためには、現在（高校生時期）の交流では、高齢者との会話が多く、小さいころの交流では、単なる会話ではなく、生活に密着した生活文化の伝承的交流や祖父母からの愛情が関連する。そして高校生の場合には、高齢者の学習内容の中で、高齢者との交流や高齢者の知恵や生活文化を学ぶことを希望し、高齢者から何かを教えてもらって作ることに興味や関心が高いとしている。

中央教育審議会第2次答申（1997）では、高齢社会に対応する教育の在り方の中で、高齢者と触れ合う等の体験学習を行うに当たっての留意点を3つ挙げている。1. 子どもたちと高齢者が、対話を通じて、心の交流をすること。2. 子どもたちの個性や、学校・地域社会の実情に応じて柔軟に考え、できるところから始めることが大切であること。3. 子どもたちが高齢者のために何かをして役に立つという気持ちを持つことにとどまらず、高齢者から自分たち自身が学んでいるという気持を自然に培っていくこと。これら3点である。

そこで、交流内容として、家庭科の学習内容に関わるもの（生活文化）の中で高齢者が得意とするものを高校生に教えてもらうということにした。小川裕子は2002年度から近隣の高齢者と静岡大学教育学部の学生との交流活動を継続的に実施している¹⁹⁾。この高齢者

を中心としたグループである〇学区地区社会福祉推進協議会の代表者の方に、以上のような主旨を説明し、交流活動に参加可能な人を募ってもらった。そして参加してくれる高齢者の得意なもので高校生に伝えたい生活文化について、具体的に作るものを設定してもらった。その結果作るものは、布で作る花、紐で作る亀のキーホルダーなどの手芸品、生活用品である巾着袋、そして昔の子供たちのおもちゃである、竹とんぼやお手玉ということになった。これらのものづくりを通して、生活文化の知恵や技術を知ることができるだろう。そして、裁縫道具を使った巾着袋やお手玉、布で作る花などは被服製作実習にもなり、昔のおもちゃは、保育の学習にもつながる。また、従来の高齢者との交流を行う実践では、1回のみで終わることがほとんどであるが間を2週間あけて、2回行うこととし、両世代のコミュニケーションがより深まり、生活文化の知恵や技術の継承が少しでもゆとりを持って行えるように計画した。

そして交流活動自体が目的となってしまうように(第2章第3節参照)、本研究では、交流活動の後に題材「高齢者の生活と福祉」の学習が位置づいているという中で、異世代交流活動を計画することとした。高校生が高齢者に関心を持ち、高齢期を自分の問題として捉え、「高齢者の生活と福祉の学習」が深まるようにするため、題材学習の導入の段階で交流活動を取り入れる。

2. 異世代交流活動の意義を明らかにする方法

(1) 収集する資料

本研究では、高校学校家庭科「高齢者の生活と福祉」の学習に関わらせて、異世代交流活動を計画し実践する。題材「高齢者の生活と福祉」について学習する高校生にとって高齢者との交流活動を行うことが、どのような意義があるのかについて明らかにする。

また、高校生のみならず高齢者の立場からも交流活動の意義について考察する。これは原田の福祉教育実践の10の提案の②として「目的やねらいを共有すること」とあり、交流活動の意義を明らかにするに当たって、高校生サイドのみならず、高齢者にとっても何らかの意義があることを明らかにすることが重要だと考えたからである。

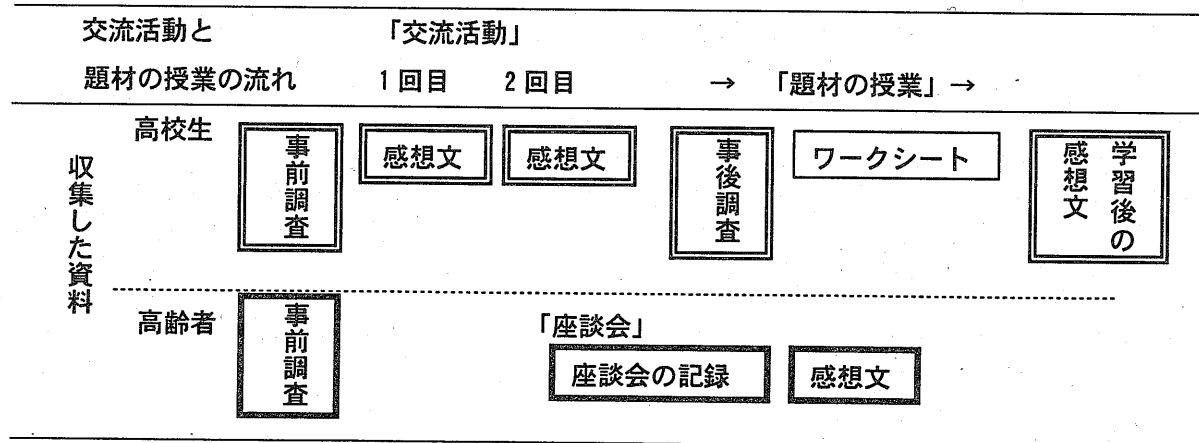


図 1-2-1 異世代交流活動と題材「高齢者の生活と福祉」の学習の流れと意義を明らかにするために用いる資料

収集する資料は、高校生については図 1-2-1 の中に で示した①交流活動の事前と事後の調査、②毎回の交流活動直後の感想文、図中に で示した③題材「高齢者の生活と福祉」の授業中の生徒のワークシートと図中に で示した授業後の感想文である。次に高齢者については図中に で示した④交流活動前の事前調査、⑤交流活動直後の座談会の記録と交流活動の感想文である。ただし、題材の学習は、静岡市立商業高等学校、矢代哲子教諭によって計画、実践された。

資料の収集時期は、高校生については、事前調査は題材の学習に入る 1 ヶ月前の 5 月初め、交流活動直後の感想文は活動直後の 1 週間以内、事後調査は 2 回の交流活動の 2 週間後の 6 月半ば、題材学習後の感想文は、題材学習後の定期試験時である 7 月初めに実施する。

高齢者については、事前調査は交流活動の直前、座談会と交流活動の感想文は、交流活動終了の直後に実施する。

(2)分析方法

高校生にとっての意義を明らかにする方法として、まず第 4 章で高校生を学級集団としてとらえて、学習の深まりについて分析する。ここでは事前調査で生徒の高齢者との関わりの実態や高齢者に対する意識等を量的に把握し、事前調査と事後調査による高齢者に対する意識の変化を見る。そして交流活動直後の感想文を中心とした記述内容から学習の深まりについて分析し、交流活動の意義を考察する。

高校生の学習の深まりを把握するための 2 通りの分析方法を設定した。1 つは、交流活動を行うことによる学習の深まりについて、毎回の交流活動直後の感想文の記述内容に注目し、分類、検討することである。記述内容は「高齢者について」「高齢者の教え方について」「教わった内容について」「生徒自身の思い」の 4 つに分類することができた。2 つ目として、「高齢者の生活と福祉」の学習の深まりについて、単に知識の獲得にとどまらない関心・意欲や思考などの面にも注目し、分析していくことにする。そのために現行の高等学校指導要録における「家庭」の評価の観点である「関心・意欲・態度」「知識・理解」「思考・判断」「技能・表現」の 4 点を活用する。事前調査や事後調査、交流活動直後の感想文、学習後の感想文の記述内容について以上の 4 観点に注目して検討することにする。

次に第 5 章では 1 人 1 人の学習の深まりの変化を見ることとした。高校生は、交流活動を行う事前の段階で、1 人 1 人に高齢者との関わり方の違い、高齢者に対するイメージの違いが見られるからである。そして交流活動においても、グループごとに関わる高齢者や作るものが違う。ここでは第 4 章で用いた事前調査や事後調査、交流活動直後の感想文、学習後の感想文に授業中のワークシートを加え、交流活動の内容の違いや関わった高齢者などを踏まえ、個人の変化から学習の深まりについて検討したい。これらをもとに交流活動で得たものについて明らかにする。

高齢者については、第 6 章において、まず事前調査によって、年齢や生きがいなど高齢

者自身のことと若い人との関わりについての実態や意識を把握する。そして、交流活動の感想文や交流活動後の座談会の記録から、高齢者にとっての交流活動の意義を明らかにする。

3. 本論文の構成

まず第2章では、家庭科教師による既存の異世代交流活動実践についての報告を検討し、既存の異世代交流活動の動向を明らかにする。過去10年間の家庭科教育関係雑誌(2種)に掲載された実践報告を収集し、分析する。

第3章では、第2章で明らかにした異世代交流活動の実践の動向を踏まえ、今回新たに高校生と高齢者との交流活動を企画した概要とその実施についてまとめる。さらに交流活動後に前述したように矢代哲子教諭によって実施された題材「高齢者の生活と福祉」の授業概要についてもまとめる。さらに題材「高齢者の生活と福祉」について、現行の学習指導要領と、高等学校教科書「家庭総合」において「高齢者の生活と福祉」について、どのような内容が書かれているかをまとめ、考察する。

次に第4章、第5章で、高齢者との交流活動が、高校生にとって、どのような意義があったのかを明らかにする。第4章では1学級の集団として、第5章では1人1人の異世代交流活動による学習の深まりを考察していく。

第6章では、今回の異世代交流活動を行ったもう1つの世代である高齢者にとって、高校生と関わることは、どのような意義があるのかを明らかにする。

第4章、第5章、第6章の結果を踏まえて、第7章の結論で題材「高齢者の生活と福祉」の学習の一環として、今回のような異世代交流活動を取り入れる意義と課題についてまとめる。

第1章 本研究の目的・方法
第1節 本研究の目的
第2節 本研究の方法

第2章 家庭科教師による既存の異世代交流活動実践の検討
第1節 目的と方法
第2節 既存の異世代交流活動実践の全体的動向
第3節 高齢者との交流活動実践報告の特徴
第4節 既存の異世代交流活動の成果と本研究の課題

第3章 異世代交流活動と題材「高齢者の生活と福祉」の概要
第1節 異世代交流活動の計画
第2節 異世代交流活動の実施概要
第3節 題材「高齢者の生活と福祉」の授業概要

高校生

高齢者

第4章 集団としてみた高校生の異世代交流活動による学習の深まり
第1節 高校生の高齢者との関わりの実態と交流活動前後の意識変化
第2節 交流活動直後の感想文の記述概要
第3節 観点別評価による「高齢者の生活と福祉」の学習の深まり

第5章 個人の変化から見た高校生の異世代交流活動による学習の深まり
第1節 目的と方法
第2節 個人の変化から見る異世代交流活動による学習の深まり

第6章 高齢者にとっての交流活動の意義
第1節 参加高齢者の実態と感想文等から見た交流活動の意義
第2節 高齢者にとっての交流活動の意義

第7章 結論

註・引用文献

- 1) 文部省「高等学校学習指導要領解説 家庭編」実教出版株式会社 1988
- 2) 文部省「高等学校学習指導要領解説 家庭編」実教出版株式会社 1990
- 3) 文部省「高等学校学習指導要領解説 家庭編」開隆堂出版株式会社 2000
- 4) 大本久美子「高齢者の生活と福祉の教材展開 (1)」『家庭科教育』家政教育社 p.106 1996. 4
- 5) 大塚洋子「家庭科教科書における高齢者の取り扱い—1989 年学習指導要領改訂前後の比較—」『日本家庭科教育学会誌 第 41 巻第 1 号』 pp.17-24 1998. 4
- 6) 渡瀬典子「高等学校教科書に現れる高齢者関連学習の目的と高齢者観 (第 1 報) : 「家庭一般」、「現代社会」における高齢者と家族・社会の関わり方の変遷」『日本家庭科教育学会誌 第 43 巻第 2 号』 pp.109-116 2000. 7
- 7) 渡瀬典子「高等学校教科書に現れる高齢者関連学習の目的と高齢者観 (第 2 報) : アメリカ教科書研究と現行教科書との比較から」『日本家庭科教育学会誌 第 43 巻第 2 号』 pp.117-122 2000. 7
- 8) 内閣府「平成 16 年版 高齢社会白書」2004
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2004/zenbun/16pdf_index.html
- 9) 内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」2003
http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15_sougou/gaiyou.html
- 10) 内閣府「児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査」1998
http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h10_kiso/html/0-1.html
- 11) 中央教育審議会第 2 次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」1997
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/970606.htm#01
- 12) 阪野 貢『福祉教育の理論と実践』相川書房 p.12 2000
- 13) 原田正樹「福祉教育実践のクオリティーを高めるために」『月刊福祉』全国社会福祉協議会 pp.12-17 2005. 3
- 14) 河村美穂・小高さほみ・伊藤葉子・鶴田敦子「家庭科教育における福祉教育実践の方向性—体験学習を中心とした検討—」『日本家庭科教育学会誌 第 46 巻第 3 号』 pp.234-243 2003. 10
- 15) 生活文化とは「様々な地域や民族によって、自然・社会環境に応じて築き上げられてきた生活様式」と捉えた。これは、高等学校学習指導要領解説家庭編 家庭総合「(4) 生活の科学と文化(エ)生活文化の伝承と創造」における記述を参考にして作成した。
- 16) 笹島浩子・神川康子・永井敏美・浦上紀子「体験学習が他者理解に及ぼす効果—高齢者擬似体験及び世代間交流の効果—」『富山大学教育学部研究論集 No.2』 pp.43-52 1999
- 17) 荒井紀子・神川康子・渡辺彩子「児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因 (第 1 報) —生活活動の実態と高齢者観との関連—」『日本家庭科教育学会誌 第 39 巻第 1

- 号』 pp.1-7 1996 および「児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因(第2報—生活活動と学習意欲との関連—)『日本家庭科教育学会誌 第39巻第1号』 pp.9-14 1996
- 18) 山川恵美・倉盛三知代「高等学校家庭科における福祉・高齢者学習についての一考察—高校生の高齢者観との関わりから—」『和歌山大学教育学部紀要(教育科学)第53集』 pp.137-150 2003
- 19) 小川裕子「家庭科カリキュラムに関する実践的研究」『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学編)第35号』 pp.211-223 2004. 3

参考文献

- 1) 長谷川美津代「生活を主体的に営む力を育てる家庭科教育を目指して(5), (6)—『高齢者の生活と福祉』の指導—」『家庭科教育』家政教育社 pp.104-111 1994. 8, 9
- 2) 多々納道子・三島香子・立石綾子「中学校家庭科における生活福祉教育の授業実践—高齢者との交流活動を通して—」『島根大学教育学部紀要(教育科学)第30巻』 pp.25-34 1996. 12
- 3) 上浦澄子「地域の生活文化を学び、よりよい豊かな生活の創造と実践力を育てる指導 高齢者の生活と福祉を中心として(1), (2)」『家庭科教育』家政教育社 pp.103-111 1997. 4, 5
- 4) 吉原崇恵・鈴木裕乃「住まいと家族の関係を考える授業研究—家具・家電の配置のシミュレーションをとおして—」『静岡大学教育学部研究報告(教科教育篇)第31号』 pp.147-167 2000. 3
- 5) 大川原 潔「障害のある人や高齢者との交流 共に生きる教育の基本と展開」教育出版株式会社 2002
- 6) 稲垣忠彦・佐藤学『子どもと教育 授業研究入門』岩波書店 2002
- 7) 学会記事「カリキュラムつくりと実践の検討Ⅱ高等学校 実践報告：地域と結ぶ世代間交流 実践者：永井敏美」『日本家庭科教育学会誌 第47巻第2号』 pp.163-169 2004. 7
- 8) 工藤文三「高等学校改訂指導要録 解説と記述例」明治図書出版 2005
- 9) 静岡県高等学校教育研究会 家庭科部会「家庭科教育に関する研究報告」2005
- 10) 牧野カツコほか17名「家庭総合」東京書籍株式会社 2005

第3章 異世代交流活動と題材「高齢者の生活と福祉」の概要

第1節 異世代交流活動の計画

〇学区地区社会福祉推進協議会のスタッフを中心とした地域の高齢者に参加してもらい、高校生と高齢者との交流活動を計画することにした。

小川裕子が2002年度から毎年1回、高齢者と子ども（大学生・小学生）の交流活動を計画、実施してきた大学の地元〇学区地区社会福祉推進協議会の方々に対して、高校生（静岡市立S高等学校2年生1クラス）との交流活動への協力を依頼し、内容について相談した。交流活動の内容として、高齢者の得意とするもので生活文化に関すること（手芸・昔のおもちゃなど）を高校生に教えてもらうことと、間を2週間おいて、計2回（1校時×2）実施し、すべてを班ごとに分かれて活動するという条件を示した。また教室として、S高等学校1階の図書室で実施できることを考えてもらった。その結果、作るものは布でつくる花、竹とんぼ、お手玉、巾着袋、亀のキーホルダーの5種となった。以下に実施概要の詳細を示す。

参加高校生：静岡市立S高等学校2年生（1クラス）

1回目（計40名）2回目（計39名）

参加高齢者：〇学区地区社会福祉推進協議会関係者

1回目（計10名）2回目（計10名）

実施日時：1回目 2005（平成17）年5月20日（金）第3校時（10:45～11:35）

2回目 2005（平成17）年6月3日（金）第3校時（10:45～11:35）

（どちらも「家庭総合」の授業時間）

実施場所：静岡市立S高等学校 図書室（1階）

活動内容：高齢者の得意とするもので、生活文化に関するものを高校生に教えてもらう。（布で作る花、竹とんぼ、お手玉、巾着袋、亀のキーホルダー）

班構成：作るものごとの班のメンバー構成については（表3-1-1）に示す。なお各班のメンバー構成は、高齢者については、各々作成するものについて得意とするものだが、高校生については、家庭科担当の矢代教諭によって出席番号順に割り振って決めた。

班構成 (表 3-1-1)

制作物	布で作る花							
高齢者	M. T (81歳・女)							
高校生	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8
	S. A	T. A	T. A	M. I	M. I	N. I	Y. I	N. I
	男	男	女	女	女	女	男	女
制作物	竹とんぼ							
高齢者	I. I (67歳・男) / I. I (74歳・男)							
高校生	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16
	Y. U	T. O	T. O	A. O	H. O	A. O	T. K	M. K
	男	男	男	女	女	女	男	女
制作物	お手玉							
高齢者	K. T (69歳・女) / T. T (73歳・女)							
高校生	No.17	No.18	No.19	No.20	No.21	No.22	No.23	No.24
	M. K	N. K	S. S	E. S	R. S	S. S	M. S	Y. S
	女	女	女	女	男	女	女	女
制作物	巾着袋							
高齢者	S. N (73歳・女) / S. W (70歳・女)							
高校生	No.25	No.26	No.27	No.28	No.29	No.30	No.31	No.32
	R. S	A. S	M. T	Y. T	N. N	H. N	S. H	Y. F
	女	女	女	女	男	女	女	女
制作物	亀のキーホルダー							
高齢者	T. O (60歳・女) / E. S (66歳・女) / K. T (女)							
高校生	No.33	No.34	No.35	No.36	No.37	No.38	No.39	No.40
	M. M	H. M	R. M	K. Y	H. Y	K. Y	A. Y	Y. Y
	女	男	女	男	男	男	女	女

第2節 異世代交流活動の実施概要

交流活動の実際について、1回目と2回目に分け、それぞれ5つの製作物別に担当した高齢者の準備状況と交流活動中の概要についてまとめた。

1. 1回目の交流活動の概要（写真3-2-1）

(1) 高齢者の準備状況

参加高齢者は、あらかじめ制作物ごとに材料を用意するだけでなく、高校生が1時間中に仕上げることができるように、ある程度まで準備してくれていた。筆者らとの打ち合わせでは、材料の用意ということをお願いしていたので、予想外のことであった。各々の制作物の準備状況は以下の通りである。

まず、布の花では、布を必要な大きさに裁断し、葉や花の形に切っていた。また作り方の説明の紙を生徒の人数分用意していた。次に竹トンボについては、自宅裏の竹を伐採し、さらに竹とんぼの羽や軸の寸法に切りそろえていた。お手玉は、布を必要な大きさに裁断することと中に入れる小豆も1個分の材料を1つずつビニール袋に入れてあった。巾着袋では、布と紐を、必要な大きさに裁断してあった。亀のキーホルダーも必要な長さに紐を切って、作り方の説明の書いた紙を人数分用意していた。

(2) 授業時間中の概要

高齢者は、高校生に教える時には、いつも生徒のところに行って丁寧に教えていた。とても熱心だった。高校生も集中して取り組んでいた。分からないことを熱心に聞いたり、高齢者が見本を見せると、何とかして理解しようとじっくりと見ている姿がみられた。矢代教諭によると、いつもの授業より生徒が集中して真剣に取り組んでいて良かったということだった。

交流活動開始直後には、高齢者と関わることに戸惑っている様子も見られた。活動時間中も高齢者と高校生との会話が少なかったが、徐々に高齢者と高校生の距離が近づき、会話も増えていった。

また、計画段階では、2回の交流活動で高校生は2種類作ることを考えていた。しかし、1回目の交流活動を実施してみると、高齢者の予想以上に高校生の制作には時間がかかり、1時間ではほとんど完成できなかった。これについては活動終了後の片付けの時に、「今の子は、道具をうまく使えないんだな」とか「きつと、こういうことをあまりやることがないんだろうね」などという声が高齢者から多く聞かれた。生徒が道具を使い慣れていないこと、思ったより作業が進まなかったことに高齢者が大変驚いていた。

2. 2回目の交流活動の概要(写真3-2-2)

(1) 高齢者の準備状況

高齢者は活動が始まる前には30分くらい前に集まり、自分たちの準備したものをお互いに見せ合って話し合いながら、さらに高校生が完成できるようにと、作る手順について考えたり、作業をしやすいように準備してきた材料を並べたりと工夫している姿が見られた。とても楽しそうに準備をしていた。

2回目は、高齢者が1回目の高校生の作業の進み具合から判断して、時間内に作品が仕上がるようにとさらに途中まで作ってきたものを高校生が完成させる形になった。布で作る花は、葉の部分と花をいくつか作っており、それに高校生が作った花を1つ付け加えれば、完成できるように準備していた。竹とんぼは、羽の軸をさす場所に穴をあけ、羽の部分についてもある程度削っておいたものを用意し、高校生が少し削れば完成するところまで作成していた。お手玉では、1つは完成させた上に2つ目を小豆を入れる段階までを作っていた。巾着袋では、1回目には端を袋縫いさせていたが、なかなか進まなかったため、新たに材料を必要な大きさに裁断し、布の端にロックミシンをかけ、しるしつけまで行ったものを準備していた。亀のキーホルダーは、比較的作業が早く進んでいた生徒もいたため、2つ目の材料まで準備していた。

以上のように、高齢者が1回目に知った高校生の作業スピードにあわせた準備をきめ細かくやってくれたために、2回目には、高校生が時間内に完成させることが出来た。

(2) 交流活動中の概要

1回目と比べると、2回目には高校生が楽しそうに高齢者と話をしている場面が多く見られた。高齢者にも笑顔が多くみられ、いきいきとしていた。活動中に男子生徒が高齢者から「男性だけど、針の使い方がうまいねえ」とほめられている場面も見られた。友達同士で、お互いに完成した作品を見せ合ったり、完成して満足そうにしている生徒もいた。竹とんぼやお手玉で、高齢者からコツを教えてもらいながら、遊んでいる姿も見られた。さらに、亀のキーホルダーは、高齢者から参加した高校生全員にプレゼントがあった。これには高校生も、とても喜んでいて、後日、亀のキーホルダーをカバンにつけたり、布の花を飾ったり、竹とんぼを飛ばして遊んだりする生徒もたくさんいるということで、活動で作ったものやプレゼントされたものを日常生活に生かしている様子が見られる。

第3節 題材「高齢者の生活と福祉」の授業概要

本節では、異世代交流活動を実施した静岡市立S高等学校において、矢代教諭によって実践された題材「高齢者の生活と福祉」の授業概要について述べる。また題材「高齢者の生活と福祉」について、学習指導要領や教科書の記述を踏まえ、矢代教諭の実践の特徴を明らかにする。

1. 高等学校学習指導要領における「高齢者の生活と福祉」

(1)文部省1999年版高等学校学習指導要領と高等学校学習指導要領解説¹⁾における「家庭総合」の「高齢者の生活と福祉」を抜粋し、以下にまとめた。

高等学校学習指導要領

第2 家庭総合

2 内容

(3) 高齢者の生活と福祉

高齢者の心身の特徴と生活、高齢者の福祉などについて理解させるとともに、介護の基礎を体験的に学ぶことを通して、高齢者の自立生活を支えるために家族や地域及び社会の果たす役割について認識させる。

ア 高齢者の心身の特徴と生活

加齢に伴う心身の変化と特徴について理解させるとともに、高齢者の生活の現状と課題について認識させ、高齢者との適切なかかわりについて考えさせる。

イ 高齢者の福祉

高齢社会の現状と課題について考えさせ、高齢者福祉の基本的な理念と高齢者福祉サービスについて理解させる。

ウ 高齢者の介護の基礎

日常生活の介助を体験的に学ぶことを通して、高齢者介護の心構えやコミュニケーションの重要性について認識させ、高齢者と適切にかかわることができるようにする。

3 内容の取扱い

(1)内容の構成及びその取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

ウ 内容の(3)については、学校や地域の実態等に応じて、学校家庭クラブ活動等との関連を図り、福祉施設等の見学やボランティア活動への参加をはじめ、身近な高齢者との交流の機会をもつよう努めること。

(2)内容の範囲や程度については、次の事項に配慮するものとする。

ウ 内容の(3)のイについては、高齢者福祉に関する法律や制度の詳細に深入りしないこと。また、高齢者福祉サービスについては、代表的なものを扱うこと。ウについては、日常生活の介助として、食事、着脱衣、移動などのうちから選択して実習させること。

高等学校学習指導要領解説

(3) 高齢者の生活と福祉

ここでは、高齢者の加齢に伴う心身の変化と特徴、高齢者の生活、高齢者の福祉の基本的理念と高齢者福祉サービスなどについて理解させるとともに、介護の基礎を体験的に学ぶことを通して、高齢者の自立生活を支えるために家族や地域及び社会の果たす役割を認識させる。

高齢化が進行する中、すべての生徒が加齢に伴う一般的な心身の変化と特徴を理解して高齢者を肯定的にとらえ、高齢者とかかわることができるようにすることが重要なことである。したがって、ここでは、高齢者の心身の特徴と生活、高齢者の介護の基礎に重点を置くこととし、高齢者福祉に関する法律や制度については、趣旨や理念を理解する程度とする。

指導に当たっては、学校家庭クラブ活動等との関連を図り、実際に地域の高齢者を訪問したり、学校に招いたり、福祉施設等を訪問したりするなどして、高齢者との触れ合いや交流など実践的な学習活動を取り入れるようにする。

ア 高齢者の心身の特徴と生活

高齢者の加齢に伴う心身の変化と特徴について、一般的な傾向と個人差が大きいことを理解させる。また、高齢者の生活の現状と課題について、具体的な事例などを基に認識させ、高齢者との適切なかわりについて考えさせる。

イ 高齢者の福祉

我が国の高齢化の特徴や居住地域の高齢化の状況について理解させ、高齢社会の現状と課題について考えさせる。特に後期高齢者の増加に伴う介護は重要な課題であり、高齢者福祉の基本的理念と高齢者福祉サービスについて理解させる。

ここでは、近年の高齢者福祉の基本的な理念を理解させることに重点を置き、法律や制度そのものの詳細に深入りしないようにする。また高齢者福祉サービスについては、施設福祉サービス、在宅福祉サービスの代表的なものを扱う。

ウ 高齢者の介護の基礎

日常生活の介助を実習を通して学ぶことにより、高齢者介護の心構えやコミュニケーションの重要性について認識させ、高齢者と適切にかかわることができるようにする。

ここでは日常生活の介助として、食事、着脱衣、移動などを取り上げ選択して実習させる。学校家庭クラブ活動等と連携を図り、さらに発展させて高齢者とかかわる学習活動を行うことも考えられる。

(2) 考察

高等学校学習指導要領では、高齢者の生活と福祉を中心にしている。高齢者の生活では、高齢者の心身の特徴や高齢者の生活と課題、高齢者の福祉では、高齢社会の現状と課題や高齢者福祉の基本的な理念や福祉制度の概念である。

高校生にとって、高齢期はまだ経験の無いものであり、また高校生の時点では、介護する立場ではないため関心が非常に薄い。しかし、高齢社会の中で高齢者と共生しつつ高齢期まで見通した豊かな一生を送ることが望まれる。高校生にとって、高齢者についての学習は必要なものである。そこで、この題材「高齢者の生活と福祉」の学習では、高齢者をもっと身近に感じ、高齢社会の課題を自分の問題としてとらえ、問題を見つけ、解決していく能力を身に付けていかななくてはならないのではないかと考える。

これらを踏まえ、学習指導要領を見たとき、高齢社会の現状や課題、高齢者の生活と課題については知識として得ることはできるものの、これらの問題に関心を持ち、高校生自身の問題として捉えることができないのではないだろうか。そのためライフサイクルの中の1つという視点で高齢期をとらえ、高齢社会の課題や、高齢者の生活の課題を考えることが必要になると思われる。さらには祖父母をはじめとした地域の高齢者と関わり、高齢者を身近に感じる事が、最も必要とされるのではないかと考える。

2. 高等学校家庭科の教科書にみる「高齢者の生活と福祉」

(1) 高等学校の家庭科の教科書を用い、「高齢者の生活と福祉」がどのような内容が掲載されているかを検討する。用いた教科書は「家庭総合」の『家庭総合—ともに生きる』一橋出版²⁾、『家庭総合 21』実教出版³⁾、『家庭総合生活の創造をめざして』大修館書店⁴⁾の3冊である。大修館書店の教科書は、矢代教諭が使用しているため、他の2社は教科書を2種類以上出版していることから、利用している教師が多いと予想されるためである。記載内容について、高齢者の生活、高齢者の福祉、高齢者の介護、その他と4つに分類し、まとめた(表3-3-1)。

(2) 考察

3冊の教科書に共通するものとして、高齢者の心身の特徴と生活では、高齢者のからだところ、高齢者の経済生活・健康・社会生活について、高齢者の福祉では、高齢社会の現状や社会保障、福祉の基本的理念、福祉サービスについて、高齢者の介護では、高齢者とのコミュニケーションや介助の具体的方法について書かれている。また高齢者差別や高齢者と家族の現状について、さらに介護の問題では介護者の抱える問題にも触れている。さらに、ライフサイクルのなかの高齢期や、豊かな高齢期について、高校生が高齢者となった時という視点が含まれていた。

教科書による違いをみると、高齢者の心身の特徴の範囲では、大修館書店は、一般的なことを取り上げているが、一橋出版、実教出版では個人差があることを大きく取り上げている。高齢者の健康については、大修館書店だけが、生と死についても、とりあげている。高齢者とのコミュニケーションについては、大修館書店では、高齢者と私たちとして、高齢者との交流を取り上げているが、一橋出版では、介護をするにあつて、介護の必要な高齢者とのコミュニケーションをとりあげ、実教出版では、介護の必要な高齢者を含んだ全ての高齢者とのコミュニケーションのあり方を大きくとりあげている。バリアフリーについては、大修館書店では、住居のバリアフリーについて、一橋出版や実教出版では、バリアフリーのまちづくりについてとりあげている。大修館書店にはなかったが、実教出版では、福祉の基本的理念として北欧の理念について、一橋出版では高齢者福祉の中でボランティアについてふれていた。高齢者の介護では、大修館書店は、他の2つと比べ、介助について詳しく書かれている。また、全体的にみると大修館書店には統計などの図表が多く掲載されている。

3. 題材「高齢者の生活と福祉」の授業概要

本研究の交流活動の引き続いて実施された静岡市立S高等学校、矢代哲子教諭によって計画、実践された授業の概要は以下の通りである。

(1) 題材「高齢者の生活と福祉」のねらい

- 1) 高校生と高齢者の決定的な違いは、死が遠いか近いかにある。それが高齢者の心理面とどのような関係があるか考える。
- 2) 人はどのように老いるのか、エイジングのメカニズムを理解する。その上で高齢期をどう生きるかを考える。
- 3) 福祉政策の現状を知り、高齢者の抱える問題点を考えることを通して、社会の広い視野でとらえることができるようになる。

(2) 題材「高齢者の生活と福祉」の授業内容

1) 悩み相談「祖父母に聞く」(家族の分野で既に実施している)

(ねらい) 生涯発達概念を理解する。高齢者の知性を知る。

2) VTR「若い」を視聴する

(ねらい) 高齢者分野の全体像をつかむ。

3) プリント「若い悲しみを知る」

(ねらい) 高齢者の心の奥にある思いを理解する。

4) プリント「高齢者の生活を見つめよう」

(ねらい) 高齢者の心身の変化を具体的に学習する。そして、これまでの学習を通して高齢者の姿を多面的に見ることができるようになる。

5) 班学習 ルポ「あなたの老後の運命は」(著:大熊一夫)

班を作って、1章ずつ担当する。みんなに分かるように1枚の紙にまとめる。その資料の発表会をする。

(ねらい) 介護の大変さと虐待の事実などの実態を知ること、どうすればよいか、自分で考えることができる。

6) VTR「老いて華やぐ」を視聴する。(水上勉さんの生き方から学ぶ)

7) まとめ

元気な高齢者や介護の必要な高齢者など、実態は様々であるが、どちらも現実である。このような認識に基づいて、自分はどのような人生の組み立てをするのか、その心がまえを作文等で表現する。

*本研究の交流活動は、1)と2)の間の授業時間に実施した。

(3)実施した題材「高齢者の生活と福祉」の授業についての考察

授業内容2)3)4)6)の授業で用いた生徒のワークシート、題材「高齢者の生活と福祉」の学習後の生徒の感想文から、授業内容についての考察をする。

この授業では、様々な高齢者の実態をプリントやVTRも用いて展開している。高齢者の心身の特徴の理解に重点を置き、身体的特徴だけでなく、心理的な特徴についても詳しく扱っている。この授業のように、精神的な特徴として若い悲しみについての中で死に対する恐怖感を扱っている実践例は少ない。そして老いることとはどういうことかを理解できるようにしている。様々な高齢者の実態や福祉政策等を取り上げることで、高齢者について、色々な視点から学ぶことができ、高齢者理解が深まる内容となっている。介護の問題など福祉政策の現状については、班学習として、まとめ、発表することで、高齢者の抱える問題について考えさせ、生徒自身が高齢者の問題について関心を持ち、自分の考えをもてるようにしている。これら的高齢期についての学習を通して、高齢者理解を深め、自分の人生設計について考えさせている。

註・引用文献

- 1) 文部省「高等学校学習指導要領解説 家庭編」開隆堂出版株式会社 2000
- 2) 一番々瀬康子ほか 42 名「家庭総合—ともに生きる」一橋出版株式会社 2004
- 3) 春日寛ほか 47 名「家庭総合 21」実教出版株式会社 2003
- 4) 中間美砂子ほか 47 名「家庭総合 生活の創造をめざして」大修館書店 2003

第4章 集団としてみた高校生の

異世代交流活動による学習の深まり

第1節 高校生の高齢者との関わりの実態と交流活動前後の意識変化

1. 目的と方法

交流活動を行う静岡市立S高等学校の2年生の1クラス(40名)の生徒に対して、交流活動前の時点で、高齢者とどの程度関わっているのか、高齢者についてどのように考えているのかを明らかにするため、事前調査を行った。また、高校生が高齢者に対して、どの程度関心をもっているか、どのように意識しているかについては、交流活動後にも事後調査として行った。方法は、質問紙調査法の留置法、自記式である。調査時期は、事前調査は、高齢者の学習に入る前で、交流活動実施前でもある5月の初め、事後調査は交流活動後の6月半ばである。

ここでは、まず事前調査の結果の中で、選択式の回答について高校生の高齢者との関わりの実態や高齢者に対する意識について明らかにする。続いて高齢者に対する意識について事前調査と事後調査の結果を比較する。

さらに、事前・事後調査の意識の変化によって類型化し、それと感想文との関連についても検討する。

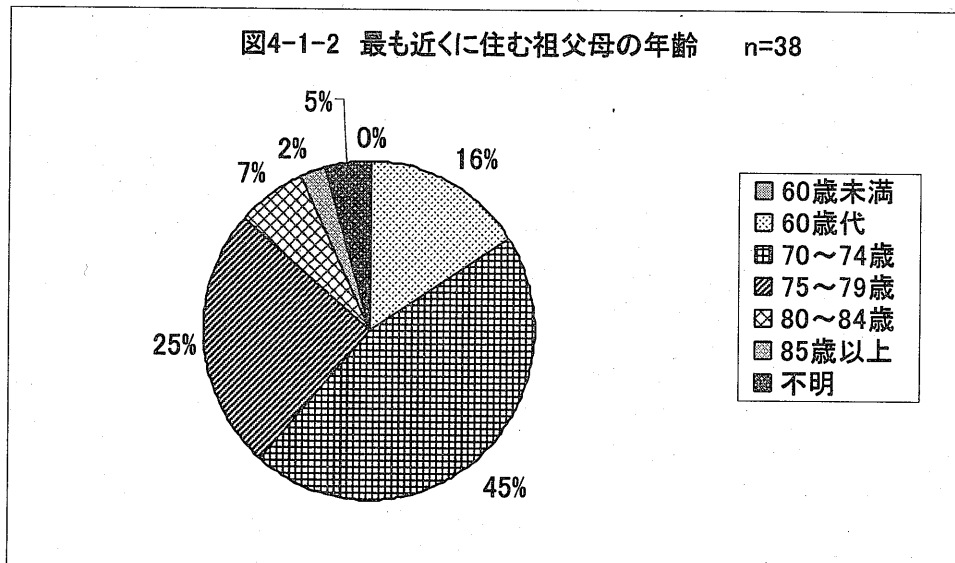
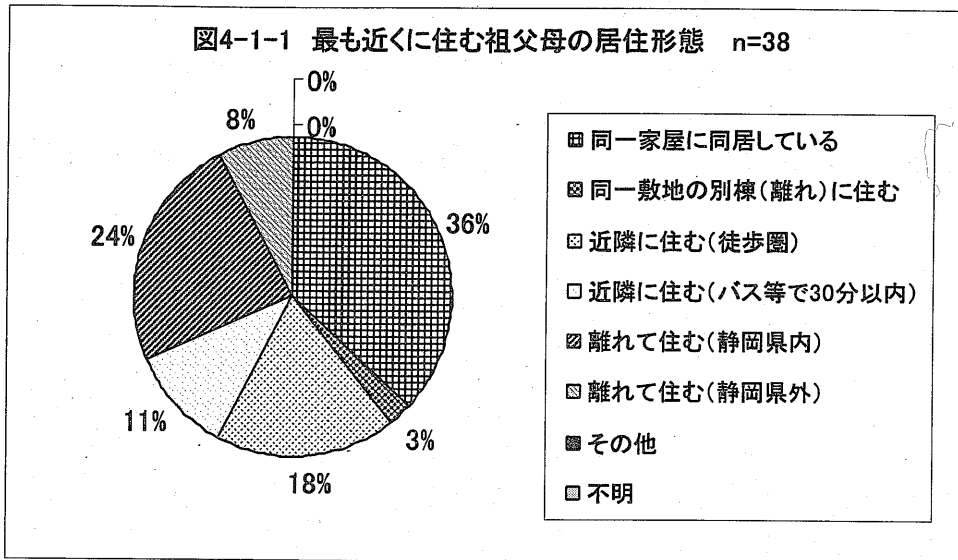
2. 事前調査による高校生の実態

(1) 高校生の高齢者との関わりの実態

1) 高校生の祖父母について

まず現在、最も近くに住んでいる祖父母について居住形態を聞いたところ(図4-1-1)最も多かったのが「同居している」の36%、次いで「静岡県内に離れて住む」が24%となっている。近隣に住んでいることも多く、「徒歩圏」では18%、「バス等で30分以内」では11%となり、合わせるとほぼ3割になる。しかし「県外に離れて住む」ものは1割以下と少ない。対象とした生徒達は、祖父母と同居又は近隣に住むものが7割近くを占める。

次に最も近くに住む祖父母の年齢(図4-1-2)を見ると、70歳代前半で45%と最も高く、半数近くを占めている。次いで、70歳代後半が25%、60歳代が16%となっている。(祖父と祖母の両方いる場合、複数回答もある。)これにより、高校生が最も関わる可能性が高い高齢者の年代は、70歳代であることが分かる。したがって70歳代というのは、日常生活で祖父母と高齢者と関わっている生徒にとっては、比較的慣れていて、接しやすく親しみやすいと予想できる。



2) 地域の高齢者との関わりについて

近所に住む地域の高齢者との関わりについての質問では(図4-1-3)、まず「挨拶をする」という質問で、最も多いのが「しない」で32%となっている。3割の生徒は、挨拶をすることもなく、地域の高齢者と関わる事が全くないことが分かった。「良くする」「時々する」はともに21%、「たまにする」が26%となっており、生徒の7割は、挨拶をしている。しかし、そのうち「良くする」のは、2割にすぎないことが分かった。

「話をする」では、「しない」と答えた人が、53%となり、半分以上が高齢者とは全く話をすることはないことが分かる。「たまにする」と答えた人も29%であり、「時々する」13%、

「良くする」は、わずか5%だった。

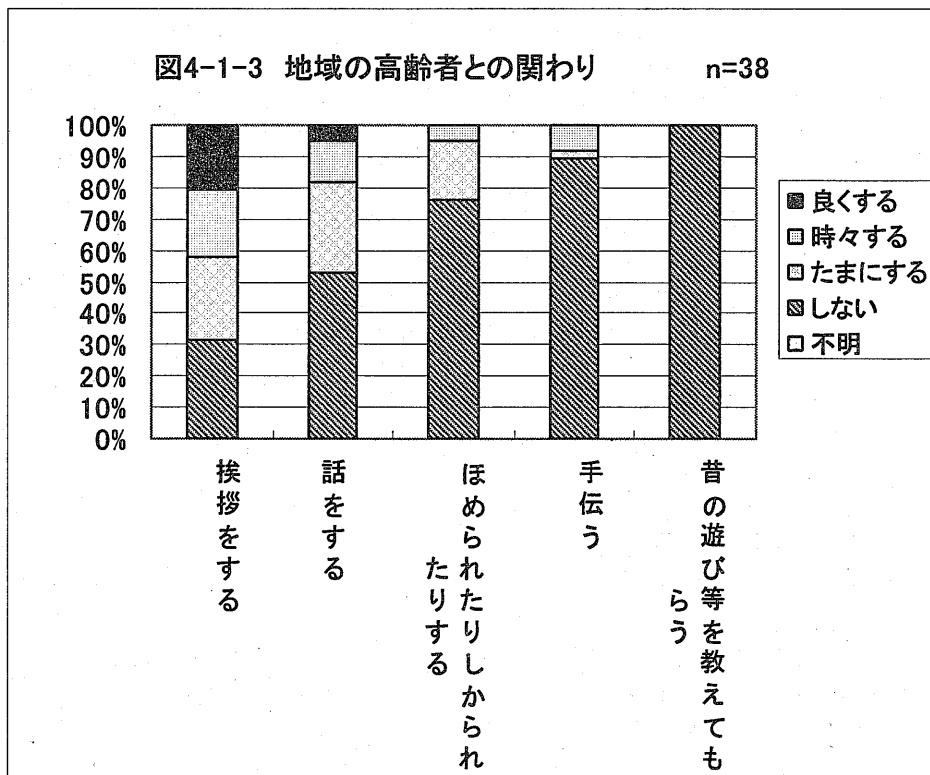
「ほめられたりしかられたりする」では、「しない」と答えた人が、77%となり、8割の生徒が高齢者と深く関わることはないことが分かった。

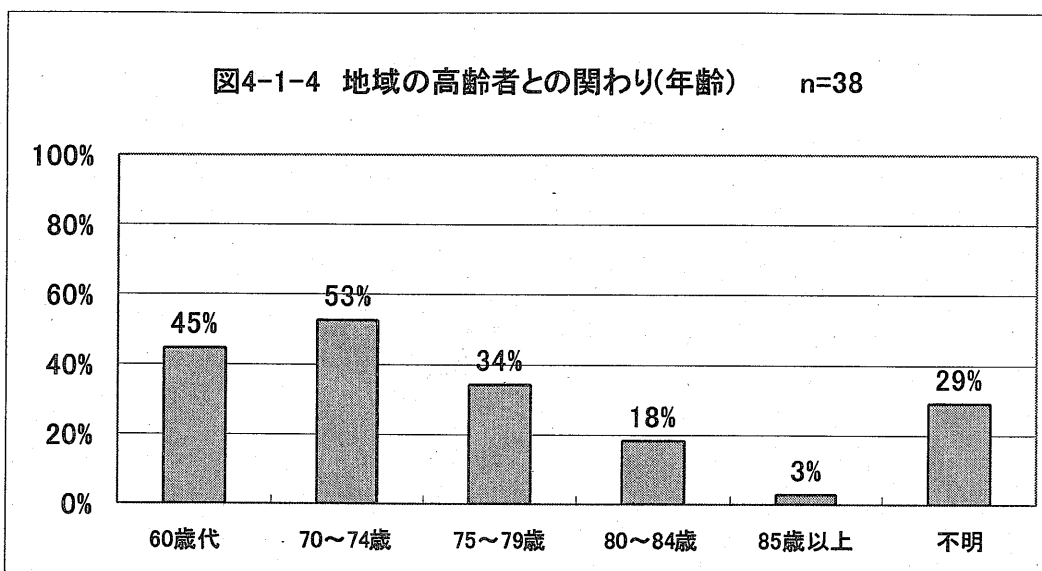
「手伝う」では、89%の生徒が「しない」と答え、地域の高齢者に対して、援助したり、一緒に何かをすることは1割程度である。しかも「良くする」と答えた生徒は、いなかった。

「昔の遊び等を教えてもらう」では、全員の生徒が「しない」と答えている。何かを教えてもらうということは、全くないといえる。

すべての項目を比較してみても挨拶や話をする生徒は半分程度いるが、ほめられたりしかられたりすることや、手伝うこと、教えてもらうことはほとんどないことが分かる。高校生には、地域の高齢者とふれ合い、一緒に何かをしたり、教えてもらったりする機会がほとんどないことも予想される。

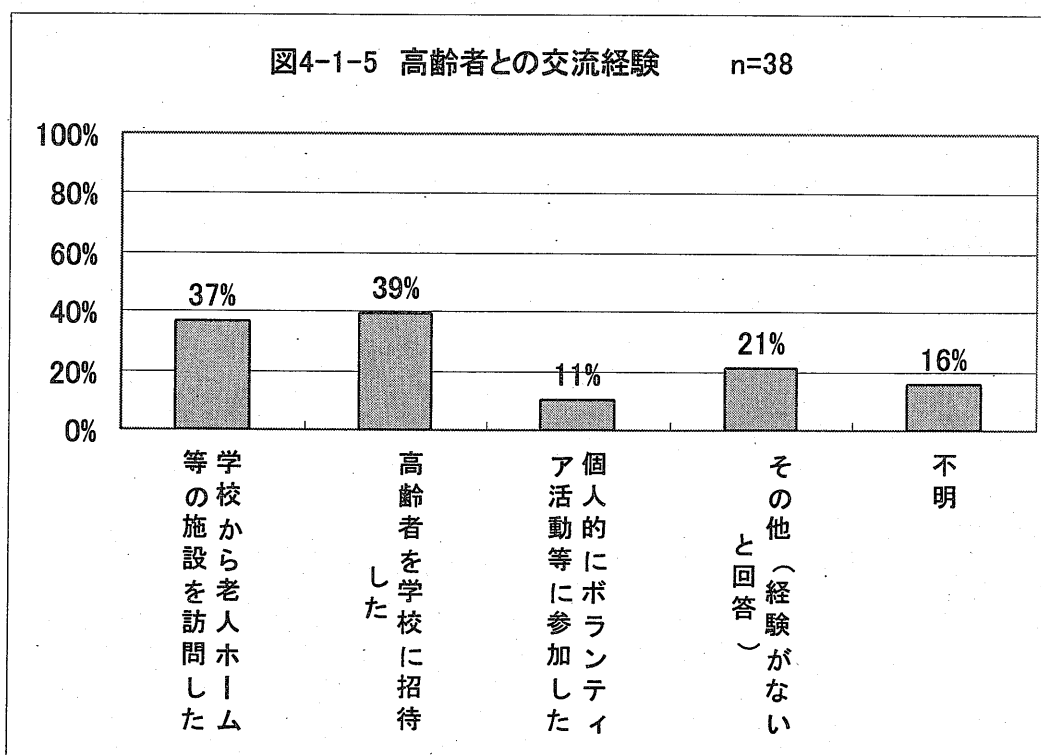
関わっている高齢者の年齢（図4-1-4）を見ると、やはり70歳代前半が多く53%、次いで、60歳代が45%となっている。これを見ると、比較的高齢者の中でも若い年代である。さらに、70歳代後半も多く34%となっている。そして、80歳代になると関わりが少ない。（複数回答）





3) 高齢者との交流経験について

高齢者の学習の中での、高齢者との交流の経験があるかを見ると、(図4-1-5)「高齢者を学校に招待した」が39%、「学校から老人ホーム等の施設に訪問した」については、37%となっている。ほぼ同じ割合で4割の生徒が経験している。ボランティアでの交流経験も11%いる。しかし一方で、全く経験がないと答えている生徒は21%、回答のない不明の生徒とあわせると37%もいる。(複数回答)



(2) 考察

高校生の高齢者との関わりの実態について明らかにしたが、祖父母と同居をしている生徒は3割程度、地域の高齢者との関わりも、約3割の生徒は挨拶をすることもなく、話をすることがない生徒が5割を超えている。そして挨拶を良くすると答えたものは、2割で、話を良くすると答えたものは、わずか5%だった。ほめられたりしかられたりするについては8割、手伝うについては9割、教えてもらうについては、すべての高校生がしないと答えている。高齢者との交流経験は、施設訪問や学校に招いた交流がそれぞれ4割である。

これらのことから、高校生は、高齢者と深く関わるケースがほとんどなく、高齢者について知らない、関心がないことが予想される。そのために高齢者の学習に入る前の段階で高齢者と交流することは、高齢者について関心をもつことや、偏見をなくし、正しく理解するためにも必要なことだと考える。

3. 交流活動実施前後の高校生の高齢者に対する意識の変化

(1) 事前調査時の高齢者に対する意識 (図4-1-6)

「高齢者への親しみを感じる」では、「あまり思わない」が最も高く45%、次いで「少しそう思う」が26%となっている。「そう思う」が8%しかいない結果となった。「あまり思わない」「そう思わない」を合わせると6割を超え、半数以上が高齢者に対して親しみを感じていないことが分かった。

「高齢者と話をしていて楽しい」では「少しそう思う」が45%と最も高く、「あまり思わない」が26%、「そう思わない」が21%となっている。

「高齢者と自然に話ができる」では、「少しそう思う」が31%、次いで、「そう思わない」が29%となった。

「高齢者からもっと話を聞きたい」では、「あまり思わない」が51%となっており、最も高い。高齢者に対して、積極的に関わろうとする人が少ないことが分かる。

「高齢者に色々教えてほしい」では、「少しそう思う」が47%、「あまり思わない」が29%となっており、高齢者に色々教えてもらいたいと感じている生徒が若干多いことが分かった。すなわち高校生は、先行研究と同様に、高齢者に対して自分たちの知らないことを教えてほしいとは思っているが¹⁾、前項2の2)で明らかになったように、地域の高齢者から教えてもらうことは、ほとんどないことが分かった。

高齢者に対する関心について、事前調査の項目を比較してみると「そう思う」「少しそう思う」を合わせたものが5割以上であるものは、「高齢者と話をしていて楽しい」51%、「高齢者と自然に話ができる」55%、「高齢者に色々なことを教えてほしい」56%であり、どれも半分程度である。これは、高齢者に対して、話をしたり、教えてもらうことに肯定的に感じている生徒が過半数を占めていることが明らかとなった。他方で、「高齢者への親しみを感じる」では、「そう思う」「少しそう思う」あわせて34%、そして「高齢者からもっと

話を聞きたい」については31%となっていて、7割程度の生徒が高齢者に親しみを感ず、高齢者ともっと話をして関わりをもちたいとは思っていない。

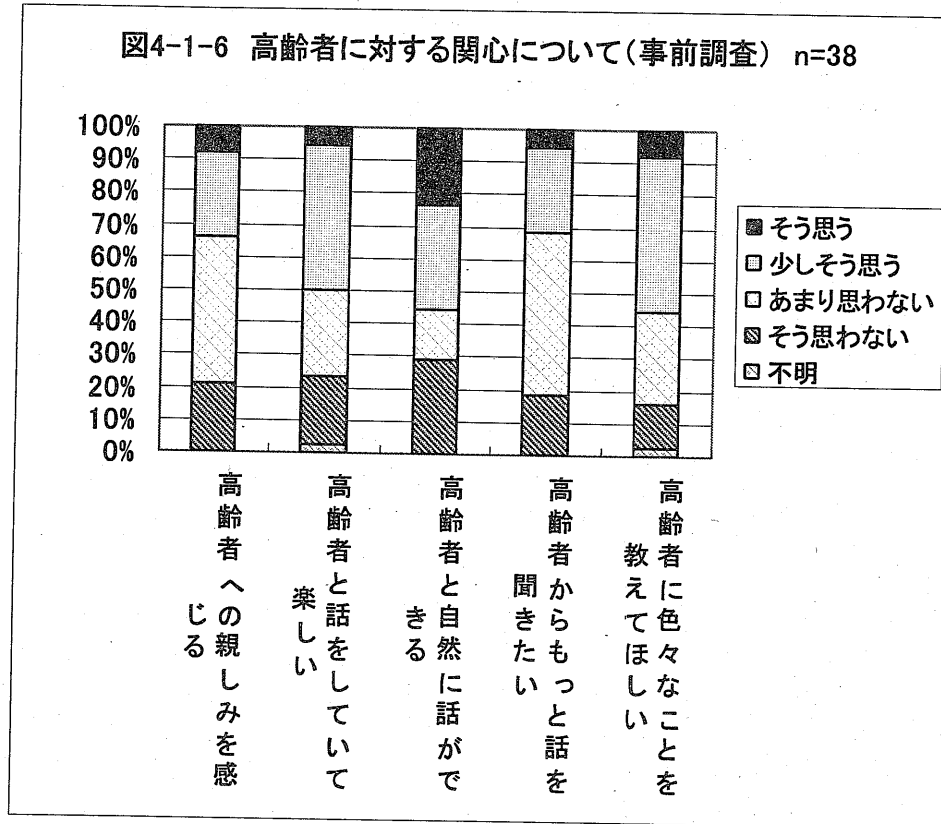
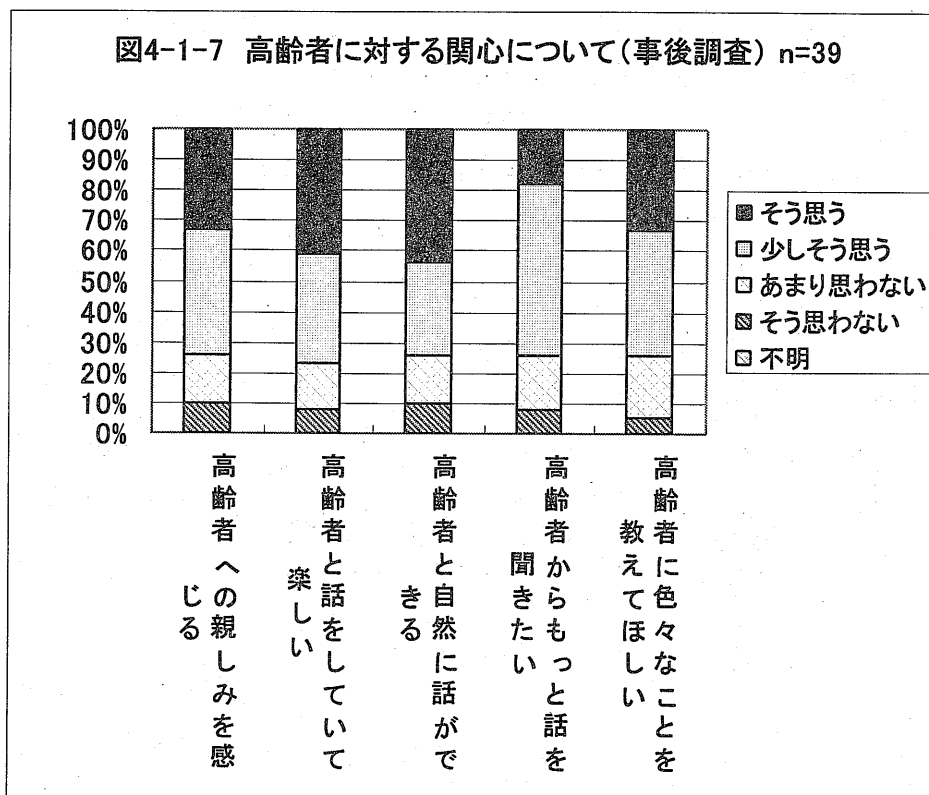


図4-1-7 高齢者に対する関心について(事後調査) n=39



(2) 高齢者に対する意識についての事後調査結果(図4-1-7)と事前・事後調査結果の比較・考察

事後調査において、「高齢者への親しみを感ずる」では、「少しそう思う」が最も高く42%、次いで「そう思う」が33%となり、合わせて75%に達した。事前調査時は34%であったため、41%増加した。「あまり思わない」でも事前調査では45%だったのが、15%となり30%減少した。これにより高齢者に対する親しみが大変高まったことが分かった。

「高齢者と話をしている楽しい」では、最も高いのが「そう思う」の41%、次いで「少しそう思う」が36%となった。合わせると77%に達した。事前調査時には「そう思う」が5%だったのに対して、事後調査では36%も上昇したことになる。

「高齢者と自然に話ができる」で、最も高かったのは「そう思う」の44%、そして「少しそう思う」の31%となっている。これも合わせると75%となった。さらに「そう思わない」では、事前調査時では29%もいたものが、10%となり約3分の1に減少した。

「高齢者からもっと話を聞きたい」では、「少しそう思う」が56%、「そう思う」と「あまり思わない」が18%となった。「少しそう思う」「そう思う」を合わせると74%となった。事前調査時の31%と比べ、43%も増加する結果となった。そのうえ「あまり思わない」については、事前調査時で51%も占めていたが、33%も大幅に減少したことが分かる。

「高齢者に色々なことを教えてほしい」では、「少しそう思う」が41%、「そう思う」が33%となり、これも合わせて74%となった。特に「そう思う」では、事前調査では8%であったが、33%となり25%も増加した。「そう思わない」も「あまり思わない」も事前調査に比

べ約1割減少している。

高齢者に対する関心についての事後調査では、全ての項目を比較してみると、どの項目も、「そう思う」「少しそう思う」を合わせると7割を超えた。「高齢者への親しみを感じる」「高齢者からもっと話を聞きたい」は、事前調査で3割程度だったのが、7割まで上昇し、高齢者に対して親しみをもち、話をしたりすることで関わっていきたいと考えるように変化している。そして、「高齢者と話をしている楽しい」「高齢者と自然に話ができる」「高齢者に色々なことを教えてほしい」でも5割程度だったのが、7割に増加し、特に「そう思う」が5%、24%、8%だったのが、41%、44%、33%となり、それぞれ20~30%に上昇している。逆に「あまり思わない」「そう思わない」は、合わせると約3割だが、事前調査と比べると事後調査ではどちらにも2分の1から3分の1に減少している。

これらの結果から、交流活動によって、高校生は高齢者に対して肯定的にとらえ関心をもち積極的に高齢者と関わろうとする意識をもてたと考えられる。そして事前調査時に比べ、事後調査時で高校生が、高齢者への親しみを感じたり、関心を持つことができていることは、その後の高齢者の学習に取り組む姿勢にも効果を及ぼしたと推測する。

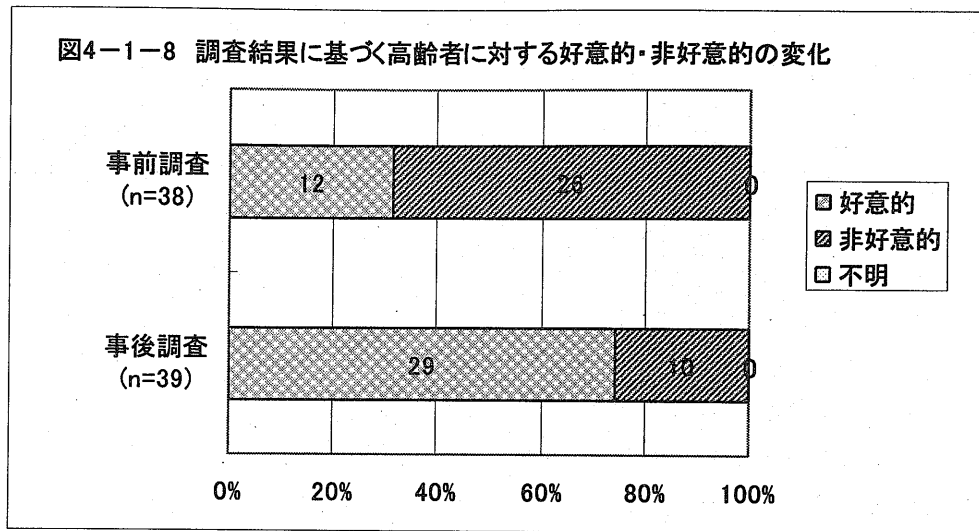
4. 高齢者に対する意識の変化に関する調査と感想文との関連

(1) 調査結果による高齢者に対する意識変化

事前調査で行った項目の中で、「高齢者にもっと話を聞きたい」という項目を取り上げ、事前調査と事後調査それぞれに、「そう思う」「少しそう思う」と答えた人を「高齢者に対して好意的である」(以下好意的とする)、「あまり思わない」「そう思わない」と答えた人を「高齢者に対して非好意的である」(以下非好意的とする)として、それぞれの生徒数と割合を集計した(図4-1-8)。これは次項(2)で自由記述による感想文から高齢者に対する意識を読み取るのに対して、調査選択肢による意識の把握である。

事前調査時には、「好意的」だった者が12名(32%)、「非好意的」だった者が26名(68%)であった。それが事後調査時には、「好意的」の者が29名(74%)、「非好意的」の者が10名(26%)となり、大きく変化し、高齢者に対して好意的になった生徒が増加した。交流活動後には、7割を超える生徒が高齢者を肯定的にとらえることができるようになっていく。

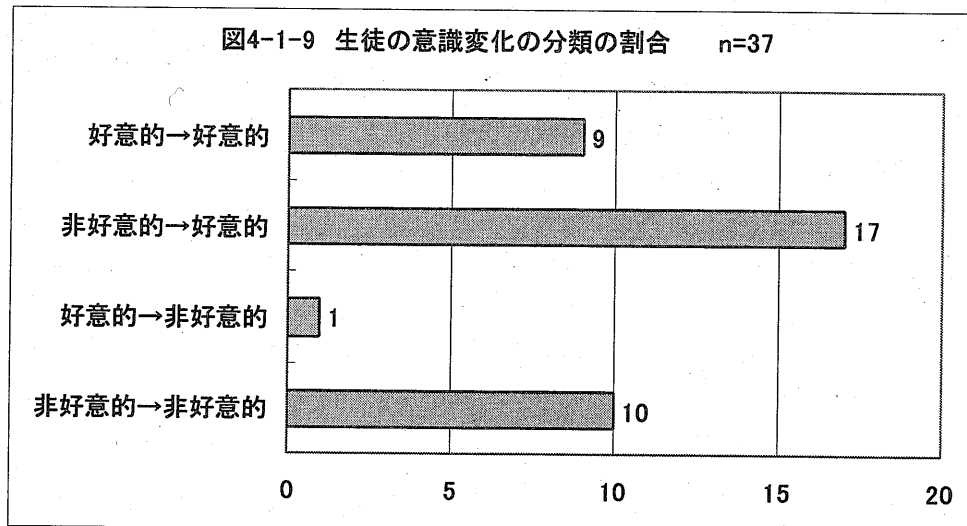
図4-1-8 調査結果に基づく高齢者に対する好意的・非好意的の変化



次に、生徒の意識の変化に注目する。事前調査で「好意的」と答え、事後調査でも「好意的」と答えた生徒（以下「好意的→好意的」群とする）、事前調査で「好意的」事後調査で「非好意的」と答えた生徒（以下「好意→非好意」群とする）、事前調査で「非好意的」、事後調査では「好意的」と答えた生徒（以下「非好意的→好意的」群とする）、事前調査でも事後調査でも「非好意的」と答えた生徒（以下「非好意的→非好意的」群とする）の4つに分類することとした（図4-1-9）。

まず「好意的→好意的」群は9名（24%）、「非好意的→好意的」群17名（46%）、「好意→非好意的」群1名（3%）、「非好意的→非好意的」群10名（27%）となった。特に「非好意的→好意的」が最も多くなり、5割弱を占めている。

図4-1-9 生徒の意識変化の分類の割合 n=37



(2) 交流活動後の感想文による高齢者に対する意識の変化について

生徒の感想文の中で「今まで自分が思っていたよりも・・・」「やっぱり・・・」など、高齢者に対する意識がはっきりと書かれていたものは、29事例だった。(表4-1-1) その中で、1) 高齢者に対して従来から好意を感じていたが、交流活動後も同様に好意的な記述が書かれた事例は6事例、2) 高齢者に対して非好意を感じていたものが、好意的に変化した記述が22事例、3) 高齢者に対して従来から好意を感じていたものが、非好意的な記述が書かれていたものは0事例、4) 高齢者に対して非好意を感じていたが、非好意的なまま記述されていたものが1事例だった。

事前・事後調査の生徒の意識の変化の4つの分類と比較すると29事例のうち17事例(59%)が一致した。一致しなかった事例のうち、感想文の1) 好意的から好意的が2事例、感想文の2) 非好意的から好意的が10事例だった。その中で最も多いのが、感想文では2) の非好意的から好意的で、調査では4) 非好意的から非好意的であったものが6事例だった。詳細については以下で述べることとする。

1) 「好意的→好意的」の意識の変化

事前調査から、高齢者と同居している、または徒歩圏内に祖父母が住んでいるため、日ごろから高齢者とのかかわりがある生徒が4事例だった。身近な祖父母との関わりによって、高齢者に対して好意的に感じているようである。高齢者には慣れてしていると書いている生徒も多く、高齢者と接することに抵抗感が無いようである。

2) 「非好意的→好意的」の意識の変化

交流活動前は、高齢者について、否定的なイメージを抱いており、「高齢者の方はきつとのんびりゆっくりだろうと思っていたら、意外にテキパキしていたので、驚いた。」「想像していたより若いし、しっかりしていたので、びっくりしました」という感想から見られるように、のんびり、頑固、厳しい、ゆっくり、弱々しい、話していることが分からない、と思っていた生徒が多い。しかし、高齢者と接してみても優しい、親切、親しみやすい、若い、テキパキしていた、説明が分かりやすい、楽しかった、と書いている生徒が多く認められた。

さらに、「自分の祖父母以外の高齢者と話す機会がなかなかない」「私はあまり高齢者と接する機会がなくて、」と書いているように、高齢者との関わりが少ない生徒が、高齢者との接し方について不安に感じていたものも5事例あった。しかし「あんまり話さなそうとか会話があわなそうと思っていたけど、実際は全然違って、びっくりした。思ったより話せてよかったです。」「実際会うとそんな難しいものではありませんでした。」などと書いている生徒も見られ、実際にふれあうことで、高齢者に関わることに抵抗がなくなっている。

3) 「好意的→非好意的」の意識の変化

感想文の記述によれば、好意的から非好意的に変わったものは認められない。

4) 「非好意的→非好意的」の意識の変化

記述でみると、1事例あり、「大きな声ではっきりとしゃべらないとしっかり伝わらなかった。」と書いていた。これは、高齢者と接してみても接し方を学んだと考えることができる。接し方について、学習する機会を設ける必要があるだろう。

なお同様の調査と感想文との関連について、保育体験学習では、77事例中60事例(78%)が一致したということである²⁾。高齢者に関する学習では、乳幼児に関する学習と比較すると一致しない割合が高いことが分かった。また、高齢者との交流活動の感想文を分類するにあたり、分類の基準を設けることが、大変難しかった。高齢者のプラスの部分について書かれていたものを好意的に、マイナスの部分について書かれている者を非好意的に分類したが、マイナスの部分を書いていることは、高齢者と現実を知り、接し方を理解することにもなるため、必ずしも関わることにに対して非好意的になるとは限らないからである。しかしながら、調査の結果と感想文の関連を検討したことにより、体験による意識の変化を把握する方法として、選択肢で答える調査だけではなく、感想文などの記述内容を分析、検討することが必要であることが明らかになった。

表4-1-1 感想文 (29事例) からの抜粋

分類	感想文
1) 好意的→好意的 (6事例)	<p>・やさしかった。縫い方とかが分からないと、教えてくれたり、見本を見せてくれて、うれしかったです。自分が思っていた通り、やさしかった。(女)</p> <p>・優しく教えてくれたし、分かりやすかったです。器用で、簡単に作っていてうらやましかった。自分の家の近所に住んでる高齢者は、ずっと話して、ずっと笑っているの、みんなそうだと思っていました。でも、やっぱりそうでした。ずっと笑っていてやさしかったです。(女)</p>
3) 非好意的→好意的 (22事例)	<p>否定的な高齢者観からの非好意 (17事例)</p> <p>・とても優しく教えてくださって、分かりやすかったし、とてもやりやすかった。今まで高齢者のイメージは、頑固とかそんな感じのイメージだったけど、地区社協の方とふれあってみて、イメージが変わった。とても優しくあたたかいイメージに変わった。(男)</p> <p>・細かい事まで親切に丁寧に教えて下さったので、とても分かりやすかった。見本も見せてくれたり、1対1になって教えてくれたりもしたので良かった。高齢者の方はきっとのんびりゆっくりだろうと思っていたら、意外にテキパキしていたので、驚いた。(女)</p> <p>・一つ一つやる事に「どう？できた？」と聞いてくれてすごい良かったです。あと、できてないともう一度優しく作り方を教えてくれたり、うまくできないと「こうだよ」と手伝ってくれてすごく楽しくできました。想像していたより若いし、しっかりしていたので、びっくりしました。(女)</p> <p>・高齢者の人は、自分が思っていた以上に、趣味を楽しんでいたように思えた。(男)</p> <p>・私は普段おばあちゃんやおじいちゃんと遊んだり、接する機会がないので、今回遊べて楽しかったです。とても弱々しい印象があったけど、元気でやさしかったです。(女)</p> <p>心配、不安からの非好意 (5事例)</p> <p>・私はあまり高齢者と接する機会がなくて、実際に接して、意外に楽しくできました。教えてくれる人もやさしくて、良かったです。はじめは、あんまり話さなそうとか会話があわなそうと思っていたけど、実際は全然違って、びっくりした。思ったより話せてよかったです。(女)</p> <p>・とてもわかりやすく教えてくれて思っていたより、楽しかった。最初は高齢者は言っていることが分かりそうもないと思っていたが、とても分かりやすかった。(女)</p> <p>・自分の祖父母以外の高齢者と話す機会がなかなかないので、どんな風に接すればいいか分からなかったけど、実際会うとそんな難しいものではありませんでした。(女)</p>
4) 非好意的→非好意的 (1事例)	<p>・大きな声ではっきりとしゃべらないとしっかり伝わらなかった。とっても楽しかったです。(女)</p>

第2節 交流活動直後の感想文の記述概要

1. 目的と方法

ここでは、交流活動直後の生徒の感想文を資料として、そこで記述されている内容に注目することによって、交流活動から生徒が何に注目しているかについて考察することにした。感想文の記述の内容は、「高齢者について」「高齢者の教え方について」「教わった内容について」「交流活動についての生徒自身の思い」の4つに分類して、捉えることができた。制作物の班ごとに個人の記述内容について、分類したものを表3-2-1(1回目)表3-2-2(2回目)に示す。感想文中に記述された各々の内容ごとに区切って把握した。表中では各記述内容が該当するところに○、このうち今までとは異なり交流によって変化してこう思うようになったとはっきりと記述してあるものについては◎で示した。その他としてあげたもの以外のものは、○と◎の合計数が文章の量に、ほぼ比例するといっていよい。

2. 1回目の交流活動後の感想文の分析結果(表4-2-1)

1回目の交流活動では、203の記述が見られた。最も多かったものが「高齢者について」63記述、次いで「高齢者の教え方について」55と記述なっている。「教わった内容について」は45記述、「交流活動についての生徒自身の思い」は40記述となっている。「高齢者について」「高齢者の教え方について」最も印象に残っていることが分かる。それに対して「教わった内容」「生徒自身の思い」は、比較的少ない。次に各分類項目の詳細について見ていく。

(1) 高齢者について

「高齢者について」最も多かった記述が、「とにかくすごい優しかったです。」など「優しくかった」というものが19、「高齢者とは思えないほど元気でびっくりした」など「元気だった、元気をもらった」12、「縫い物に慣れているようで、すごく手際良く丁寧に縫っていました。」など「器用だった・上手だった・早かった」が8だった。

その他「祖母より色々なことを生きがいにしているのか、言葉もはきはきしていて、人の話も良く聞いてくれた。」「老人は身体能力が低下するし、なりたくないと思っていたが、色々なことを知っているから、悪くないと思った。」があった。

(2) 高齢者の教え方について

「高齢者の教え方について」で最も多かった記述が、「分からないと教えてくれたり、見本をみせてくれたりしてうれしかったです」など「工夫してあり、分かりやすかった」15、「つまずいてしまうとすごく丁寧に教えてくれた」など「親切で丁寧だった」14、「手伝ってもらったので、上手にできました。」など「教えてもらってできた・すごく手伝ってくれた」が13だった。

その他として「自分はある程度上手じゃないけど、ほめてくれた」「高齢者の方が近くで見えてくれたので、安心して作業を進めることができました。」というものもあった。

(3) 教わった内容について

「けっこう難しくて、なかなか上手くできませんでした。」「お手玉の袋がこんなに大変だと思わなかったです。」など「難しかった」18、「竹とんぼは飛ばすためにとても正確に作らなければならないので、そのためのやりかたを教えてもらった。」「なみ縫いの仕方を教わった。返し縫いとか、玉どめの仕方とか色々。」など「作り方について」17だった。

(4) 生徒自身の思い

「私は普段おばあちゃんやおじいちゃんと遊んだり、接する機会がないので、今回遊べて楽しかったです。」など「楽しくできた」が9、「会話があわなそうと思っていたけど、実際は全然違ってびっくりした。思ったより話せてよかったです。」など「思ったより話すことができた」9となり、この2つが多かった。

その他として「自分は祖父母以外と話す機会が、なかなかないので、どんな風に接すればいいか分からなかったけど、実際にあってみるとそんなに難しいものではありませんでした。」「友達と話すのとは、ひとあじもふたあじも違ってとても新鮮でした。」というものもみられた。

交流会1回目感想(表4-2-1)

作ったもの	参加高齢者	生徒の番号	高齢者について															教え方について										教わった内容について						生徒自身の思い				
			元気だった・元気をもらった・動き回っていた	優しくあった	器用だった・上手だった・早かった	笑顔がいい	意外と若い・しっかりしている	ハキハキ、テキパキしていた	明るかった	興味を楽しんでいる・生きがいがある	その他	工夫して分かりやすく教えてくれた	親切、丁寧に教えてくれた	よく手伝ってくれた	説明が良くわからない・理解するのが難しい	分からない時にやってくれた・すぐに教えてくれた	その他	難しかった・なかなかできなかった	作り方	初めてやった・とまどった	楽しかった	昔のことについて	その他	楽しかった	思っていたより話せた・親しみやすかった	楽しくできた	知らない事を知れた・いい経験になった	高齢者と接する機会が多く、慣れている	普段高齢者とは関わりがない	その他の	うれしかった	その他						
花	M・Tさん	1																																				
		2																																				
		3																																				
		4																																				
		5																																				
		6																																				
		7																																				
		8																																				
竹とんぼ	I・Iさん、I・Iさん	9																																				
		10																																				
		11																																				
		12																																				
		13																																				
		14																																				
		15																																				
		16																																				
お手玉	T・Tさん、K・Tさん	17																																				
		18																																				
		19																																				
		20																																				
		21																																				
		22																																				
		23																																				
		24																																				
巾着袋	S・Wさん、S・Nさん	25																																				
		26																																				
		27																																				
		28																																				
		29																																				
		30																																				
		31																																				
		32																																				
亀のキーホルダー	E・Sさん、T・Oさん、K・Tさん	33																																				
		34																																				
		35																																				
		36																																				
		37																																				
		38																																				
		39																																				
		40																																				
項目の合計	19	12	8	5	5	4	3	2	5	15	14	13	7	4	2	18	17	3	3	3	1	9	9	5	4	4	4	4	5									
分類の合計	63							55							45					40																		
合計	203																																					

その他

1	思い	友達と話すのとは、ひとあじもふたあじも違ってとても新鮮でした。
2	関わり	自分はあんまり上手じゃないけど、ほめてくれた
3	内容	裁縫も苦手だったけど、少し楽しくできてよかったです。
7	高齢者	別に楽しいとは思わなかったけど、いつもやれないことをやれたから、その点は良かった。自分が最初と思っていたのと、さほど変わらなかった。
8	高齢者	きちんとしていると思ったけど、結構適当だった。
11	高齢者	今まで生きてきた中で知識などが、すぐくても驚いた。やはり長い間生きてるだけあって、自分たちより色々知っているんだと思った。老人は身体能力が低下するし、なりたくないと思っていたけど、色々なことを知っているのが、悪くないと思った。
12	高齢者	祖母より色々なことを生きがいしているのか、言葉もはきはきしていて、人の話も良く聞いてくれた。
19	思い	自分の祖父母意外と話す機会がなかなかないので、どんな風に接すればいいかわからなかったけど、実際あってみるとそんなに難しいものではありませんでした。
24	高齢者	思っていたよりゆっくり、おっとりでした。
32	関わり	高齢者の方が近くで見えてくれたので、安心して作業を進めることができました。
38	思い	作品を作るのに夢中になってしまって、高齢者の方と話が出来ませんでした。

3. 2回目の交流活動後の感想文の分析結果（表4-2-2）

2回目の203記述のうち、最も多かった記述は「交流活動についての生徒自身の思い」59記述だった。次いで「高齢者について」51の記述となった。「教わった内容について」は50記述、1回目に2番目に多かった「高齢者の教え方について」は、43記述となり最も少ない。1回目に最も少なかった「生徒自身の思い」が2回目には最も多くなったというのが特徴である。次に詳細についてみていく。

(1) 高齢者について

「すごく優しくかった。」など「優しくかった」が最も多く15、次いで「元気がよくて、自分たちが元気をもらった気がします。」など「元気だった」という記述が9、「やっぱ『さすがだなあ』と思うことが多かったです。」「手が器用でびっくりしました。」など「器用だった。すごいと思った」というものが9だった。

その他として「どの人も明るく充実した時間を日々送っているようでした。」と高齢者について書いているものもあった。そして1回目にはなかったが、「年の差はかなりあったが、それを感じさせなかったので、よかったです。」など「年齢を感じさせない」というものが、3だった。

(2) 高齢者の教え方について

最も多かった記述は、「失敗したところも器用になおしてくれた、たよりになった。」「ちゃんと最後まで完成できるように、ほとんど作ってきてくださったので、あとは仕上げをするだけにしてくださってうれしかったです。」など「ほとんど作ってくれた・失敗を直してくれた」が15、「一つ一つ丁寧に教えてくれました。」など「親切、丁寧に教えてくれた」が15で、この2つが最も多かった。

(3) 教わった内容について

「難しかったけど、いっぱい教えてもらったので、上手くできて良かったです。」など「難しかった」が13、「完成させることができた。うまくできた」と書いたものが12、「竹とんぼの作り方。バランスが重要でバランスが悪いと上手く飛ばない。」など「作り方、遊び方について」11だった。

その他としては、「昔の人は、竹とんぼ以外にも、自分で生活用品を作ったりしてすごいと思った。」と昔の生活用品についても考えた生徒もあった。また1回目にはなかった記述として、「まだ布だけの家ががあるので今度は自分で最後まで作りたいなと思いました。」「作った袋は使っています。使いやすい。」など学んだことを日常生活で生かしていこうとするものも6あった。

(4) 生徒自身の思い

「(話も1回目はできなかったけど、2回目では、作り方についても、学校のこととか話したりして、) 楽しめました。」など「楽しくできた」17、「(めっちゃくちゃ優しく、丁寧に教えてくださいました。) とても嬉しかったです。」「しゃべっていても楽しいし、一緒に作っていても楽しくてすごくよかったです。」など「うれしかった・良かった」が16だった。次いで、1回目にはなかったが、「色々な話が出来た・仲良くなれた」が7記述見られた。

その他として「話をしたら、『孫にしたいよ』と言ってくれたのが、嬉しかったです。」「たくさんのお話を教えてもらい、いろいろな話がありました。話し合うこともあったり笑いあえたりできて、すごく楽しかったです。」「高齢者の方とのふれあいはすごく楽しいし気持ちがなごむ感じがしました。」「私も同じくらいの年になった時、何か夢中になれるものがあったら、おばあさんやおじいさんのように楽しい老後を過ごせるかなと思いました。」など高齢者との交流活動を通して感じたことを書いた生徒が多く見られた。さらに「また、機会があったら、一緒にやりたいです。」など「また交流をしたい」と書いたものが4だった。

4. 交流活動1回目と2回目の感想文の変化

項目を比較してみると、「生徒自身の思い」では、1回目は、「思ったより話せた」など、関わることに不安な気持ちが見られたが、2回目になると「色々な話ができた」などの項目が見られ、高齢者と色々な話をする中で、高齢者について新たな一面を知ったり、仲良くなれたと思った生徒も多くいたようである。2回目になると「内容について」は、「家で実践している・活用している」という記述も見られた。「生徒自身の思い」では、「また交流したい」という感想もみられた。

全体の割合を比較してみると、1回目の交流活動の感想文では、「高齢者について」「高齢者の教え方について」の記述が多かったが、2回目には、これらの記述が減少し、「生徒自身の思い」「教わった内容について」の記述が増加している。特に「生徒自身の思い」は、1回目には40記述だったものが、2回目になると59記述となり、他と比較すると最も増加している。高齢者に丁寧に教えてもらったり、高齢者に優しくしてもらったりなど、高齢者と交流を通して、「楽しかった」「うれしかった」という思いが増加したことが分かった。

5. 活動直後の感想文から見た交流活動の意義

1回目の交流活動では、生徒は「高齢者について」「高齢者の教え方について」最も印象に残ったようである。「楽しかった」「元気だった」など、今までのイメージと違った、高齢者についての新たなイメージを持ったことが分かる。さらに「器用だった」「すごいと思った」などの記述も多く見られた。これは、高齢者の得意とするものを交流内容に取り入れたことによるものと推測される。教え方についても、「親切だった」「分かりやすかった」などの記述が見られ、高齢者が熱心に教えてくれたことが分かる。

また交流活動にあたり、どのように関わったら良いか分からないと不安を感じていた生徒もいたようだ。しかし実際に接してみると、「親しみやすい」「思ったより話せた」と感想を書いている生徒もみられた。さらに2回目になると、高齢者とたくさん話をし、楽しい時間を持てたと言う感想が多く見られるようになった。実際に関わってみたことで、高齢者との関わり方を学んだようである。「生徒自身の思い」では、2回目になると、「また交流したい」と書いている生徒も見られ、高齢者に関心を持ち、高齢者と積極的に関わっていきたいと思えるまでになったことが分かる。

第3節 観点別評価による「高齢者の生活と福祉」の学習の深まり

1. 目的と方法

高校生が高齢者との交流活動を行うことによって、「高齢者の生活と福祉」の学習の深まりが得られるのかを明らかにしたい。この場合、高齢者や福祉についての知識だけではなく、意欲や関心、思考や判断などについて、どの程度身についたかに注目する必要がある。

用いる資料は、交流活動と題材「高齢者の生活と福祉」の流れにそって収集した。具体的には、①事前調査時の「交流活動に対して期待すること」の記述、②毎回の交流活動直後の感想文、③事後調査時の「交流活動についての感想」の記述、④題材「高齢者の生活と福祉」の学習後の感想文の4点である。これらの資料について、ここでは、現行の高等学校の指導要録における教科「家庭」の評価の観点である4つ「関心・意欲・態度」（以下：関心）「思考・判断」（以下：思考）「技能・表現」（以下：技能）「知識・理解」（以下：知識）に注目して、学習の深まりを検討する。

以上の4点について、本研究における異世代交流活動を実施した「高齢者の生活と福祉」の学習の深まりについて明らかにするための視点を立てた。原田の福祉教育実践の10の提案(第1章、第1節参照 p5)と国立教育政策研究所による「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(高等学校)－評価規準、評価方法等の研究開発－(報告)」(表4-3-1)をもとにした³⁾。設定した視点は以下の通りである。

(1) 「関心・意欲・態度」

- ①高齢者の心身の特徴と生活に関心を持ち、肯定的に捉えている。高齢期を自分の問題として考えようとしている。
- ②高齢者との関わり方について考えようとしている。

(2) 「思考・判断」

高齢者を援助の対象としてではなく、生活主体の個人として捉え

- ①高齢者の心身の特徴の一般的な変化と個人差に気づき、高齢者の生活の実態と課題について具体的に考えを深めている。
- ②高齢社会の現状や課題、福祉サービス、高齢者の自立生活の支援のあり方について具体的に考えを深めている。

(3) 「技能・表現」

- ①高齢者との交流を通して、高齢者の心身の特徴、高齢者の生活について表現することができる。
- ②高齢者とのふれあいを深め、適切に関わることができる。

(4) 「知識・理解」

- ①高齢者の心身の特徴や高齢者の生活、高齢者福祉サービスを理解している。
- ②高齢者との関わり方について理解している。

これらの4つの観点の各2つの視点について、①事前調査時では「関心」について、②毎回の交流活動直後の感想文、③事後調査時の「交流活動についての感想」、④題材「高齢者の生活と福祉」の学習後の感想文では、「関心」「思考」「技能」「知識」の4つに注目し、検討する。

表4-3-1 「家庭総合」「高齢者の生活と福祉」の評価基準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
高齢者の心身の特徴と生活、高齢者の福祉、高齢者の介護などに関心を持ち、意欲をもって学習活動に取り組んでいる。	高齢者の生活を支えるために家族や地域及び社会の果たす役割などについて思考を深めている。	実践的・体験的な学習活動を通して調査・研究し、高齢者と適切に関わったり、高齢者の自立生活を支えたりするために必要な基礎的・基本的な技能を身につけている。	高齢者の心身の特徴と生活、高齢者の福祉などについて理解し、高齢者の自立生活を支える家族や地域及び社会の果たす役割について認識するために必要な基礎的・基本的な知識を身につけている。

高齢者の生活と福祉の評価基準の例

<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者の加齢に伴う心身の変化と特徴、高齢者の生活に関心を持ち、高齢者を肯定的にとらえ、適切に関わろうとしている。 ・ 高齢社会の現状や課題、高齢者の自立生活支援の在り方などについて考えようとしている。 ・ 高齢者介護の心構えやコミュニケーションの在り方について考えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者の心身の特徴の一般的变化と個人差に気付き、高齢者の生活の現状と課題について具体的に考えを深めている。 ・ 我が国の高齢化の特徴や居住地域の高齢化の現状を踏まえ、高齢者福祉のサービスについて具体的に考えを深めている。 ・ 日常生活の介助についての具体的な方法や留意すべきことなどについて考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な高齢者への聞き取り調査などを通して、高齢者の心身の特徴や生活の現状について、まとめたり発表することができる。 ・ 居住地域の高齢化の状況や福祉サービスの状況について、まとめたり発表したりすることができる。 ・ 高齢者と適切に関わることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 加齢に伴う心身の変化と特徴や高齢者の生活実態を理解している。 ・ 高齢社会の現状と課題、高齢者福祉の基本的な理念と近年の高齢者福祉サービスの概要について理解している。 ・ 日常的な介助の具体的な方法や留意すべきことなどについて理解している。 ・ 高齢者に対する共感の大切さを理解している。
--	---	---	---

2. 結果(表 4-3-2、図 4-3-1)

(1) 事前調査時

事前調査では、「関心①」についての記述があったのが 22 名だった。「私たちが知らないことや色々なことを教えてもらいたと思います。」等、自分の知らないことを知っているというような記述が多く、高齢者を肯定的に捉えている。また「関心②」では 8 名に見られた。「高齢者と話をしながら、作り方などを教わり楽しく交流できたらいいと思う。」「いっぱいおしゃべりできたら、とても良い」等の高齢者とのコミュニケーションのあり方に関する記述があった。

(2) 交流活動直後の感想文(1 回目)

「関心①」が 40 名と最も多く、次いで「技能①」と「知識①」が 29 名、「関心②」が 22 名、「技能②」17 名、「思考①」2 名、「思考②」「知識②」では 0 名という結果となった。「関心①」が最も多いことから、すべての生徒が高齢者に対して関心をもち、肯定的に捉えることができたことが分かる。記述例を示す。

「細かいことまで親切に丁寧に教えて下さったので、とても分かりやすかった」(「関心①」)

「友達と話すのとは、ひとあじもふたあじも違ってとても新鮮でした。」(「関心①」「関心②」)

「とても元気でなじみやすかった。作っている時も冗談を言ったりしてまだまだ若いと思った」「高齢者の方はずっとのんびりゆっくりだろうと思っていたら、意外にテキパキしていたので、驚いた。」「今まで高齢者のイメージは、頑固とかそんな感じのイメージだったけど、地区社協の方と触れ合ってみて、イメージが変わった。とても優しくあたたかいイメージが変わった」「高齢者の方達は良くあんな細かい作業ができるなあと思った」(「関心①」「技能①」)

「知識①」

「自分の祖父母以外と話す機会がなかなかないので、どんな風に接すればいいかわからなかったけど、実際に会ってみると、そんなに難しいものではありませんでした。」「交流しやすかった。色々話しやすく話が合わないと思っていたけど、話げできた。」「自分のおばあちゃんに接するような気持ちで話げできました。」(「関心①」「関心②」「技能②」)

「老人は身体能力が低下するし、なりたくないと思っていたが、色々なことを知っているの、悪くないと思った。」(「関心①」「思考①」「知識①」)

(3) 交流活動直後の感想文(2 回目)

「関心①」は 38 名、「技能①」と「知識①」が 31 名、「関心②」が 26 名、「技能②」が 24 名、「思考①」「知識②」が 1 名、「思考②」が 0 名の順になっている。やはり 1 回目の感想と同様に「関心①」が最も多く、次いで「技能①」「知識①」となっているが、「技能②」では 1 回目より増加している。

「ここはこうしたらいいよとか全然できていない自分に何度も教えてくれました。難しかったけど、分かりやすく教えてくれたので、最後まで頑張れました。」(「関心①」)

「私はおじいさんやおばあさんと接する機会がないので、こういう機会ができて、嬉しかったし、楽しかったです。」「しゃべっていても楽しいし、一緒に作っていても楽しくてすごく良かったです」(「関心①」「関心②」「技能②」)

「子どもの頃から作っていたということもあって、すごく速く作っていた。」「自分の趣味を持っていたり、やりがいがあるということは、いいことだと思います。」「(「関心①」「技能①」「知識①」)

「大きな声でしゃべらないとしっかりと伝わらなかった。」「(「関心②」「技能①」「技能②」「知識①」「知識②」)

「どの人も明るく充実した日々を送っているようでした。私も同じくらい年になった時、何か夢中になれるものがあつたら、おばあさんやおじいさんのように楽しい老後を過ごせるかなと思いました。」「(「関心①」「思考①」「技能①」「知識①」)

(4)事後調査時

「関心①」が最も多く34名、次いで「知識①」が27名、「技能①」が26名、「関心②」が21名、「技能②」が16名、「知識②」7名、「思考①」6名、「思考②」1名の順である。「関心①」「関心②」「技能①」「技能②」「知識①」は減少したが、「思考①」「思考②」「知識②」は増加している。具体的記述例を示す。

「これからも近所であったお年寄りにも自分から話そうと思った。」「自分のおじいちゃん、おばあちゃんとももっと話そうと思った」(「関心①」「関心②」「知識②」)

「高齢者と交流して私は話す機会がなくて少し緊張したけど、楽しくできてよかったです。」「(「関心①」「関心②」「技能②」)

「1回目よりも2回目の方が気軽に声をかけることができ、高齢者も交流すれば親しくなれるんだあ～と思いました。」「(「関心①」「関心②」「技能②」「知識②」)

「高齢者といってもみなさんまだまだ若々しくて元気でした。私も年を重ねても元気でいたい。」「

「高齢者が来ると聞いていたので、どんな人だろうと思ったら、とても若々しいオーラをもった人達だった。むしろ自分より元気ではないかと思った。『高齢者』という言葉にイメージを作ってしまったのかもしれないと思った」(「関心①」「思考①」「技能①」「知識①」)

「高齢者の人も生きがいを持ってしっかりと生きているのに、虐待などをする人がいるなんて嫌です。もっと相手の気持ちだつて分からなきゃいけないと思う。みんな頑張っているんだから、しっかり支えあえばいいと思います。」「(「関心①」「関心②」「思考②」「技能①」「知識②」)

(5)学習後の感想文

「関心①」が37名で最も多く、次いで「知識①」が32名「関心②」29名、「知識②」が23名、「思考②」21名、「技能①」が14名、「技能②」が13名、「思考①」が12名との順になっている。「思考①」「思考②」「知識②」で大きく増加した。記述例は以下に示す。

「お年寄りの人達とのコミュニケーションをとるのが難しいけど、何かを覚えてもらう時などには自然に話せることが分かった。」「私は今おじいちゃん、おばあちゃんと暮らしているので、もう少し話しかけてみようと思いました。今まではうるさいと思ったりもしたけど、昔の事とかたくさん知っているの、聞いてみようと思いました。」「今高齢者はじゃまもの扱いされている。でも自分はそうは思わない。自分が出来る事をすれば高齢者ともっと仲良くなれる。」(「関心①」「関心②」「知識②」)

「今は核家族が増えているし、高齢者との接点がない人もいるから、学校や地域でもっと交流などの行事を増やして、お互い理解しあうことが大切だと思います。」(「関心①」「関心②」「思考②」「知識②」)

「高齢者になっても“夢”を持つことは大切“趣味”を持つことは大切だと感じました。」(「関心①」「思考①」「知識①」)

「ビデオや教科書では、つらい部分があったけど、実際に交流した人は元気だったし、こんな風になりたいなと思いました。」(「関心①」「思考①」「技能①」「知識①」)

「2時間の交流で私は『花』を作りました。VTRとは全然違って、楽しそうな人ばかりで、すごく優しく接してくれました。はじめは、話が合わなそうとかあんまりやりたくない…という気持ちだったけれど、今はその逆です。本当に良かったと思うし、まだもっともっといろいろなことをしたかったです。また機会があれば、こういうこともしていきたいです。」(「関心①」「関心②」「技能①」「技能②」「知識①」「知識②」)

3. 「高齢者の生活と福祉」の学習の深まりと考察

「関心①」では1回目の交流活動の感想文に最も多く40名、次いで2回目の38名となっている。「関心②」では最も多かったのが、題材学習後で29名、次いで、2回目の交流活動の感想文で26名となった。ほぼ全員の生徒が交流活動をすることで、高齢者の心身の特徴や高齢者の生活について関心を持ち、高齢者を肯定的に捉えることができたといえる。そして、交流活動時のみではなく、学習後も半数以上の生徒が高齢者と関わることに関心を持っていることも分かった。

「思考①」では、最も多いものが学習後の感想文の21名で、他の時点に比べてかなり多かった。「思考②」でも最も多いのが、学習後の感想文で12名となっている。これらは題材学習後以外の時点には、ほとんど見られなかった。

「技能①」では、2回目の交流活動の感想文で最も多く31名、次いで1回目の交流活動の感想文の29名となっている。実際に高齢者と共に活動したことで、高齢者の現状について学ぶことができたのだと思われる。また学習後の感想文でも14名が書いており、これらは交流活動を思い出し、関わった高齢者について記述している。交流活動で高齢者と交流したことが、高齢者の理解につながっているといえる。「技能②」は2回目の交流活動で最も多く24名、次いで1回目の交流活動の17名となっている。やはり交流活動を実際に行

い、さらに 2 回行ったことにより、高齢者との交流を深め、高齢者と共に生きるという姿勢が培われたと思われる。また学習後の感想でも 13 名の記述が見られた。

「知識①」は、最も多いのが学習後の感想文の 32 名、次いで 2 回目の交流活動の感想文で 31 名となっている。高齢者について、VTR やプリント等の学習だけでなく、交流活動と行ったことで、高齢者に関する理解が深まった。「知識②」では、学習後の感想文で最も多く 23 名で、他の時点と比べ、かなり多い結果となった。

4 つの観点別に結果を見ていくと、「関心」が最も高かったのは、1 回目の交流活動で 40 名、「技能」では 2 回目の交流活動の 24 名、「思考」「知識」では題材学習後が最も多く、「思考」が 25 名と「知識」が 37 名であった。1 回目の交流活動で、関心を持ち、交流活動を 2 回行ったことで、技能を身につけ、その後の学習で、知識を深め、高齢期について具体的に考えることができるようになっている。ただし、「技能」については、「技能①」は、文章に表現することであるので除いた。

次に、題材学習後の感想文の中で、交流活動の効果を考察していく。関心についての記述を見ると、39 名のうち 21 名が交流活動に関する記述（技術の①と②）についても書いている。これらにより、2 回の交流活動で高齢者と話をしたり一緒に活動したり、その後の学習の中で様々な高齢者の実態を知り、高齢者に対してばかりではなく、高齢者と関わることについても関心を持てたのではないかと考える。

「思考」に該当する記述のあった生徒が 25 名いたが、そのうち交流活動についての記述もあったものが 16 名いた。これは交流活動やその後の学習の中で、様々な生き方をしている高齢者についてや高齢者を取り巻く環境について学ぶことで、はじめて高齢者に関する学習についての考えが深まったためと思われる。これらの学習を通して、高齢期をライフサイクルの中の 1 つとして考え、高齢者を生活主体の個人として捉えることができた。そして自分の理想の高齢期について考えたり、高齢者と自分たち若い世代との交流の重要性に気づいたり、お互いの世代を理解し、共に生きていく必要性について考えることができている。理想とする高齢期について追求ができたのだと思われる。

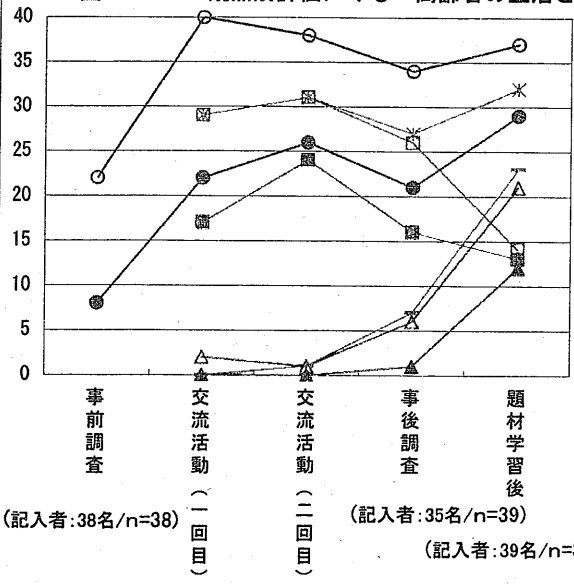
技術に該当する記述が見られる生徒は 21 名であり、高齢者と実際に交流したときのことを振り返ることができている。これらのことは学習後においても、とても印象に残っているといえる。

題材学習後に知識に関する記述のある生徒は 37 名、このうち交流活動についても書いている生徒が 18 名であった。これは交流活動をしたことにより、高齢者に関心を持ち、さらに交流活動で関わった元気な高齢者を含めて様々な高齢者の生き方など高齢者の現状について知り、自分たちが高齢者とどのように関わっていったらよいかを理解することができたからだと思われる。

表4-3-2 観点別評価による「高齢者の生活と福祉」の学習の深まり(個人別)

事前調査	交流活動直後の感想文																事後調査				学習後の感想文												
	期待すること	1回目の感想文				2回目の感想文				交流活動の感想				学習後の感想文																			
		関心		思考		技能		知識		関心		思考						技能		知識													
① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②	① ②														
1	○	○																															
2			○	○																													
3	○		○	○																													
4			○	○																													
5	○		○	○																													
6			○	○																													
7	○		○	○																													
8			○	○																													
9	○		○	○																													
10	○		○	○																													
11			○	○																													
12			○	○																													
13	○		○	○																													
14			○	○																													
15	○		○	○																													
16			○	○																													
17	○		○	○																													
18			○	○																													
19	○		○	○																													
20	○		○	○																													
21	○		○	○																													
22	○		○	○																													
23	○		○	○																													
24	○		○	○																													
25			○	○																													
26	○		○	○																													
27			○	○																													
28	○		○	○																													
29	○		○	○																													
30	○		○	○																													
31	○		○	○																													
32	○		○	○																													
33	○		○	○																													
34	○		○	○																													
35	○		○	○																													
36			○	○																													
37	○		○	○																													
38	○		○	○																													
39	○		○	○																													
40	○		○	○																													
22	8	40	22	2	0	29	17	29	0	38	26	1	0	31	24	31	1	34	21	6	1	26	16	27	7	37	29	21	12	14	13	32	23
28		40		2		17		29		38		1		24		30		35		7		16		28		39		25		13		37	

図4-3-1 観点別評価にみる「高齢者の生活と福祉」の学習の深まり



- 関心① 高齢者の心身の特徴と生活に関心を持ち、肯定的に捉えている。高齢者を自分の問題として考えようとしている。
- 関心② 高齢者との関わり方について考えようとしている。
- △ 思考① 高齢者を援助の対象としてではなく、生活主体の個人として捉え、高齢者の心身の特徴の一般的な変化と個人差に気づき、高齢者の生活の実態と課題について具体的に考えを深めている。
- ▲ 思考② 高齢者を援助の対象としてではなく、生活主体の個人として捉え、高齢社会の現状や課題、福祉サービス、高齢者の自立生活の支援のあり方について具体的に考えを深めている。
- 技能① 高齢者との交流を通して、高齢者の心身の特徴、高齢者の生活について表現することができる。
- 技能② 高齢者とのふれあいを深め、適切に関わることができる。
- * 知識① 高齢者の心身の特徴や高齢者の生活、高齢者福祉サービスを理解している。
- 知識② 高齢者との関わり方について理解している。

註・引用文献

- 1) 山川恵美・倉盛三知代「高等学校家庭科における福祉・高齢者学習についての一考察—高校生の高齢者観との関わりから—」『和歌山大学教育学部紀要(教育科学)第 53 集』 pp.137-150 2003
- 2) 中嶋明子・砂上史子・日景弥生・盛 玲子「高校家庭科における保育体験学習者の意識変容(第 1 報)—保育体験学習者の意識変容家庭の構図化—」『日本家庭科教育学会誌 第 46 号 第 4 号』 pp351-359 2004. 1
- 3) 国立教育政策研究所「評価規準の作成, 評価方法の工夫改善のための参考資料(高等学校)—評価規準, 評価方法等の研究開発(報告)—」
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/kou-sankousiryuu/html/index_h.htm

参考文献

- 1) 中嶋明子・砂上史子・日景弥生・盛 玲子「高校家庭科における保育体験学習者の意識変容(第 2 報)—生徒の感想文にみる保育体験学習者の経験内容の分析—」『日本家庭科教育学会誌 第 46 号 第 4 号』 pp351-359 2004. 1

第5章 個人の変化からみた高校生の

異世代交流活動による学習の深まり

第1節 目的と方法

第4章では、題材「高齢者の生活と福祉」の学習において異世代交流活動を実施したクラス(40名)全体の動向を検討した。しかしながら、このクラスの生徒各人は、交流活動を行う前の段階で高齢者との関わりや高齢者に対する関心や意識が1人1人違っている。また交流活動で関わる高齢者や作る内容も違っている。そのため1人1人の実態と、学習の深まりについて検討する必要があると考えた。

方法として、まず事前調査をもとに高校生の実態を把握していく。そして事前・事後調査、交流活動直後の感想文、授業中のワークシートや学習後の感想文を用い、交流活動を行う前から、交流活動、「高齢者の生活と福祉」の学習後までの経過を追って1人1人の学習の深まりの変化を見ていく。そして知識だけにとどまらない高齢者に対する関心や意欲の技能の面、「高齢者の生活と福祉」の学習についての深まりにも注目しながら、高齢者との交流活動を取り入れた題材「高齢者の生活と福祉」の学習の中で、高校生が得たものについて考察する。

先行研究により、地域の高齢者との接触度が、高齢者観や学習への関心・意欲に関連するということや今回の交流活動が地域の高齢者との交流活動であることから、日常生活での近所の高齢者との関わりや現状から、40人を4つに分類した。1. 近所の高齢者の手伝いをする程度の関わり、2. 近所の高齢者と話をする程度の関わり、3. 近所の高齢者と挨拶をする程度の関わり、4. 近所の高齢者と関わりが全くない、の4つである。それぞれの中から、特徴の見られる生徒についてとりあげ、まとめ、考察した。なお、40人全員について1人1人の変化を考察したものは、巻末資料とした。

第2節 個人の変化から見る異世代交流活動による学習の深まり

1. 分類の結果

分類結果をNo.: 氏名/制作物についてまとめた。事項の2で、とりあげた生徒については、囲んで示した。

(1) 近所の高齢者の手伝いをする程度の関わり。

No.1: S. A(男)/布で作る花, No.20: E. S(女)/お手玉, No.32: Y. F(女)/巾着袋,
No.35: R. M(女)/亀のキーホルダー

(2) 近所の高齢者と話をする程度の関わり。

No.5 : M. I (女) 布で作る花、No.8 : N. I (女) 布で作る花、
No.10 : T. O (男) 竹とんぼ、No.12 : A. O (女) 竹とんぼ、No.13 : H. O (女) 竹とんぼ、
No.15 : T. K (男) 竹とんぼ、No.16 : M. K (女) 竹とんぼ、No.18 : N. K (女) お手玉、
No.19 : S. S (女) お手玉、No.21 : R. S (男) お手玉、No.25 : R. S (女) 巾着袋、
No.26 : A. S (女) 巾着袋、No.29 : N. N (男) 巾着袋、No.31 : S. H (女) 巾着袋、
No.36 : K. Y (男) 亀のキーホルダー

(3) 近所の高齢者と挨拶をする程度の関わり。

No.9 : Y. U (男) 竹とんぼ、No.14 : A. O (女) 竹とんぼ、No.23 : M. S (女) お手玉、
No.27 : M. T (女) 巾着袋、No.28 : Y. T (女) 巾着袋、
No.33 : M. M (女) 亀のキーホルダー、No.34 : H. M (男) 亀のキーホルダー、
No.38 : K. Y (男) 亀のキーホルダー

(4) 近所の高齢者と関わりが全くない。

No.2 : T. A (男) 布で作る花、No.3 : T. A (女) 布で作る花、
No.4 : M. I (女) 布で作る花、No.6 : N. I (女) 布で作る花、
No.7 : Y. I (男) 布で作る花、No.11 : T. O (男) 竹とんぼ、No.17 : M. K (女) お手玉、
No.24 : Y. S (女) お手玉、No.30 : H. N (女) 巾着袋、
No.37 : H. Y (男) 亀のキーホルダー、No.39 : A. Y (女) 亀のキーホルダー

(5) 不明

No.22 : S. S (女) お手玉、No.40 : Y. Y (女) 亀のキーホルダー

2. 個人の変化から見る学習の深まり

(1) 近所の高齢者の手伝いをする程度の関わり

1) No.1 : S. A (男) 制作物 : 布で作る花

祖父母が近隣の徒歩圏内に住み、地域の高齢者とも関わる人が多い。事前調査においても高齢者と関わることについて比較的関心が高かった。

交流活動を行ったことについて、1回目の交流活動の感想文では、「自分は普通の人と違って、高齢者の方々とは、近所での交流をしているので、だいたいは慣れていました。友達と話すのとは、一味も二味も違って、とても新鮮でした」。事後調査時の交流について感想は、「交流するまでは、お年寄りたちとゆっくり話をしたりすることがありませんでした。」学習後の感想文の中では「今まで自分の中で高齢者というのは、どうも何を考えているのか分からず、近づきにくかった。しかし、交流したことにより、逆に自分から近づきたくなった。自分が出来る事

をすれば、きっと高齢者の方々と仲よくなれる。」と書いている。これらにより、普段から高齢者と交流のあった生徒でも、学習の中で交流を取り入れ、高齢者と関わることで、色々な話ができたりと交流が深まり、これからは自分から積極的に高齢者と関わっていこうと意欲も示している。

(2) 近所の高齢者と話をする程度の関わり

1) No.8 : N. I (女) 制作物 : 布で作る花

近隣の徒歩圏内に祖父母が住んでいて、たまにはあるが関わりがあり、地域の高齢者とは、たまに挨拶や話をする程度である。事前調査では高齢者に対して親しみや関心はあまり無く、高齢者と関わろうとは思っていない。

交流活動については、1回目で「すごいでいねいに教えてくれて、うれしかったです。もっとおっとりしてるかと思ったけど、意外とテキパキしてた。私がやって2分かかったコトも、30秒くらいでやっちゃって、さすがだなあと思った。縫い方(返し縫いとか)ざくざくぬってた!!)。2回目には「すごい気配り上手の方で1人で10人の相手をしてくれた。孫の話とかしてくれて楽しかった。機会があったらまた遊びたいと思いました」。事後調査時の感想でも、「これからも近所であったお年寄りにも自分から話そうと思った。」と書いている。高齢者について理解を深め、関心を持ち、もっと関わっていきたいと思えるようになっている。高齢者学習後の感想の中では、交流活動について「とても楽しいものでした。手先がとても器用で私が5分かかった作業も1分かからずにやってたので、驚きました。大好きなおばあちゃんって感じでとても楽しく過ごせました!!また一緒に交流したいと思いました」と書き、学習後にも高齢者について関心の高まりがみられ、共に関わって生きていこうという姿勢が培われたと思われる。

2) No.10 : T. O (男) 制作物 : 竹とんぼ

T. Oは祖父母が静岡県内に離れて住んでいて、年に数回くらい会っている。地域の高齢者とは、挨拶や話をたまにする程度である。事前調査では高齢者に対しては関心がないが、関わることには少し関心を持っている。

1回目の交流活動の感想文では、「竹とんぼを作るのがうまかったし、道具の扱い方も上手かった。結構、自分たちに気を使って下さっていたと思う」。2回目には「自分が途中失敗してしまったのを親切なことに直してくれた。みなさん本当に親切で楽しかった。今となっては竹とんぼを作るっていうのは、全くないので、いい経験になった。」と書いている。

事後調査時の感想では、「やっぱり高齢者の方々はすごいと思いました。自分の知らない知識を多くもっていたり、作業のようりが良かったり、尊敬しました。」と書いている。また学習後の感想文では「高齢者の方々と交流があったり、勉強してきたけど、それまでは、ほとんど高齢者との関わりがなくて、あんまり理解できていなかった。でも勉強してきたことは、やっぱり高齢者は必要なんだなということ。自分の数倍長く生き、自分の知らないことも多

く知っている。そして、自分の今後の生き方や老後のことについても、すごく考えさせられました。」と書いている。高齢者との交流活動を通して、高齢者に対して関心を持つことができたようになった。そして高齢者を肯定的にとらえ、高齢者理解を深めている。そして高齢期について自分の問題として考えることができている。

(4) 近所の高齢者と挨拶をする程度の関わり

1) No.23 : M. S (女) 制作物 : お手玉

M. S は、同一敷地の離れに祖父母が住んでいる。関わりもあるようである。地域の高齢者とは挨拶は良くするが、話をしたりという関わりはない。高齢者との交流経験は、老人ホームに行っている。事前調査時、高齢者に関心はあるが、自分から関わろうという気持ちはあまりない。

1 回目に地区社協の方については、「私が思っていたよりもかなり元気な人ばかりで、一つ一つとても分かりやすい教え方をしてくれるので、すごく楽しくできました。そして、すごく親しみやすい感じで良かったです」。教わった内容については、「まず最初に縫い方を教えてもらうことから始まりました。一気に縫うことができるので、とても早く仕上げることができました。中の小豆が出ないように返し縫いをすることも教えてもらいました。」と書き、高齢者と実際に関わったことで、高齢者のイメージが変わり、関わることに関心を持つことができた。さらに裁縫についても学ぶことができた。2 回目の時には、「どの人も明るく充実した時間を日々送っているようでした。私も同じくらいの年になった時、何か夢中になれるものがあったら、おばあさんやおじいさんのように楽しい老後を過ごせるかなと思いました。私たちの倍以上生きているため、自分の知恵を利用して、どうしたら楽に仕上がるか、いろいろなことを知っていました。おかげですごく楽しい時間になりました。」と書いている。また事後調査時の交流についての感想では、「高齢者には、やっぱり授業でやったように自分にあった趣味、やりたい事があることが一番重要だと思いました。もし、やりたいことがなかったら、とても寂しい思いをする。だから、小学校、中学校、高校で、自分のやりたい仕事、部活が存在するんだと思います。」と書いている。高齢者と交流し、一緒に活動することを通して、自分の高齢期を理想的にするために今自分がしなければならないことを考えることができた。

学習後の感想文では、「高齢者のことを知って、これからの私たちのことをよく考えるようになりました。とても明るく過ごす人やうつになる人いろいろいる。もっと高齢者のためになることを考えた方がいいと思った。今は外国との交流などに励む前に今まで頑張ってきた人に感謝し、高齢者と向き合っていくべきだと思う。」と、高齢者にも個人差があり、様々な生き方があることや高齢者と自分たちがどう関わっていったら良いかを考えることができている。

2) No.27: M. T (女) 制作物: 巾着袋

M. Tは祖父母と同居している。関わりについては、記述がなく分からなかった。地域の高齢者とは挨拶を時々する程度である。高齢者との交流経験では、老人ホームを訪問している。事前調査時、高齢者については、親しみがあり関心を持っているようであるが、話を聞くなど高齢者と関わることについては、あまり関心がない。

交流活動の1回目の感想文には「高齢者の方々はすごく優しく、とても老人とは思えないくらい元気な人ばかりでした。もっと厳しい方とかもいるかと思っていただけ、みんな私たちと話したりしているのが楽しそうで笑っている人ばかりでした」。内容については、「不器用な私に裁縫は無理なんですけど、高齢者の方が丁寧に教えてくださって、不器用な私が両面縫うことができました。昔はおもにこんな感じのことをやっていたんだなあと思いました。」と書いている。2回目になると「高齢者の方とのふれあいはすごく楽しいし、気持ちがなごむ感じがしました」。教わった内容については「まつり縫い?をやってみたらけっこうできた。でもどうしても玉をつくることができなかった。袋は全部完成できなかったけど、前より裁縫ができるようになった気がします。」と書いている。高齢者のイメージが変わり、高齢者と関わることに関心を持つことができた。さらに裁縫の技術だけでなく、それらの活動を通して生活文化について学ぶことができた。

学習後の感想文では、「今の日本は少子高齢化社会になってきて、老人が増えてきています。でも家族の中でもおじいちゃん、おばあちゃんとは、たくさん話をしたりしません。うまくつりあわない部分もあるし、耳が遠くて、何回も同じことを言ったりするし。でもそういう中でもやっぱりお互いのことをもっと話したり、協力し合うべきだと思う。」と書き、自分と高齢者との関わりについて振り返り、お互いのことをもっと理解し、ともに生きていく必要性について考えることができた。

3) No.34 H. M (男) 制作物: 亀のキーホルダー

祖父母が静岡県外に離れてすんでいる。地域の高齢者とも挨拶をたまにする程度のかかわりであり、日常生活で高齢者と関わるのが全くといっていいほど無い。高齢者に対して親しみはあまり無いが、「高齢者の考えていることを知りたい」などと高齢者について少しは関心がある。

交流活動では1回目には「高齢者の方は、自分が思っていた以上に、趣味を楽しんでいたように思えた。五円玉にひもをまいたりするのが、けっこう大変で、高齢者の方がよくできるなあと思った」。2回目になると、「自分が全然知らないこともたくさん知っていた」。事後調査では「2回やって思ったことは、高齢者は自分たちに詳しく教えてくれたり、親切にしてくれた。自分たちより高齢者の方の方が元気だった。」と書いている。交流活動で交流した高齢者を通して、高齢者の生活について知り、高齢者についての理解が深まったことで、高齢者を肯定的にとらえることができた。学習後の感想文では「ビデオや高齢者との交流で思ったことは、年をとっても、自分の考え次第で、楽しくもつまらなくもなってしまうのだなあと思っ

た。僕たちと交流した高齢者の人達は、自分の趣味や好きなことがあるので、ぼけたり、寝たきりになったりは、あまりないと思う。年をとっても前向きに暮らしていきたい。」と書いている。

交流活動で交流した高齢者も含めた様々な高齢者の生き方や実態を知り、自分の高齢期について考えることができた。

(5) 近所の高齢者との関わりが全くない

1) No.17 M. K (女) 制作物：巾着袋

祖父母と同居していて、毎日高齢者との関わりはあるが、地域の高齢者とは全く関わりが無い。高齢者との交流経験では、施設に訪問したり、学校に招いて交流した経験がある。事前調査では高齢者に対する関心や親しみはあまり無いようだった。

交流活動での感想文では、「想像していたより若いし、しっかりしていたので、びっくりしました。元気ももらいました」。2回目には「一回目よりも仲良くなれた気がしました。年の差はかなりあったが、それを感じさせなかったのが、よかったです。また交流をやりたいです」。事後調査の感想でも「年はぜんぜん違うけど、お互い通じる場所があったし、みんな良い人たちだったので、すごく楽しかったです。」と高齢者について、好意的に感じ、高齢者との関わることに関心を持つことができた。高齢者の学習後の感想文では、高齢者との交流についても振り返り、「高齢者との交流は全て知らない人との交流で最初はすごく緊張したし、心配でした。でもみんな元気ですごく話しやすくとても楽しかったです。やはり、今核家族が増えていくし、高齢者との接点がない人もいるから、学校や地域で、もっと交流などの行事を増やしてお互い理解しあうことが大切だと思います。」と高齢者との関わることの大切さに気づいている。また「今のうちに高齢者のことや老後のことを考えるのはすごく大切なことだと思うので、今学んでよかったです。やっぱり高齢者になってから色々考えるのでは遅いと思うし、学校で習う以外では、なかなか学べないことだと思うので、自分自身のためになりました。」と書いている。自分の高齢期について考えたり、高齢者について学ぶ必要性を感じることができている。

註・引用文献

- 1) 荒井紀子・神川康子・渡辺彩子「児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因(第1報)―生活活動の実態と高齢者観との関連―」『日本家庭科教育学会誌 第39巻第1号』pp.1-7 1996 および「児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因(第2報)―生活活動と学習意欲との関連―」『日本家庭科教育学会誌 第39巻第1号』pp.9-14 1996

第6章 高齢者にとっての交流活動の意義

第1節 参加高齢者の実態と感想文等から見た交流活動の意義

1. 目的と方法

高等学校の授業で高校生と高齢者との交流活動を取り入れたことが、参加した高齢者にどのような意義があるかを明らかにすることを目的とする。交流活動は、高校生からの一方的なものではなく、目的を共有し交流する者が各々主体的に参加するとともに、共に活動を行うことが大切である。これらのことは、共感を得るためには不可欠である。そして、参加した高齢者にとっても交流活動から何らかの得るものがあることは、高校生にも影響を与え、高校生の学びが深まることにもつながる。さらに将来的に交流活動が広がっていく可能性が増すと期待できる。

本研究では、地区社会福祉推進協議会のメンバーを中心とした地域の高齢者の有志により参加してもらった。高等学校に来てもらい、高齢者の得意とするものを高校生に教えてもらうことを柱にし、それを通して交流活動をする。このような高校生との交流活動が、高齢者にとって、どのような意義があるのかを検討していきたい。

方法として、まず参加した高齢者の実態を知るため、交流活動前に事前調査を行った。さらに文章を書くのは、苦手だという声も多かったため、2回目の交流活動直後に座談会の場を設け、交流活動の感想や反省について自由に話をしてもらう時間を確保した。さらに、その座談会直後に、交流活動の感想文を書いてもらうこととした。

2. 事前調査からみた交流活動に参加した高齢者の実態

今回の高校生との交流活動に参加した高齢者について、各人の事前調査結果を表6-1-1にまとめた。

年齢は、65歳から74歳までの前期高齢者が10名中7名で大半を占めた。その他、若い方が2人、80歳を超えた方が1人となっている。参加してくれた高齢者は、まだまだ若く介護の必要のない生き生きとした生活を送っている人が中心となっている。

地域の子どもの関わりでは、「挨拶をする」が5名、「話をする」6名、「小学生、中学生、高校生と交流する機会があれば積極的に参加している」5名となっている。自分の孫としか交流がない人も一人いたが、事前調査に答えた参加高齢者のほとんどが、地域の子どもたちと話をしたり、子どもたちと交流する機会に参加したり、何らかの関わりを持っていることが分かった。

居住形態は、同居が3名、離れに住むが1名、近隣に住む（徒歩圏）が2名、離れてすむ（静岡県内）3名であり、居住形態は様々であるが、徒歩圏以内の近くで住んでいる人が

9名中6名を占めている。

今の生活で大切にしていること・生きがいについては、「健康第一、自分の生活をしっかり出来る様」など、健康に関することを書いた人が5名で半数を占めた。次に「友達との交流」や「家族の話し合い」「地区社協の一員として地域の人と親しく交流すること」のように、他者との交流について書いている人が4名、「毎日、手芸をやっている。」「菊の花を育てる事。」など自分の趣味についてが2名、「人のためのボランティア（通院の手伝い）を実施しています。月2回、高齢者のつどいに参加しお手伝いをしております。」とボランティアを生きがいに行っている人もいた。

交流をするにあたり楽しみにしていることは、「若い方との交流により、会話、その他エネルギーを貰えそうです。」「私の息子も結婚して家を出ているので、若い人と話をするのが、楽しみです。」など高校生との交流が楽しみと書いている人が3名、「孫のような高校生がどの程度出来るか楽しみです」など生徒の反応についてが3名となっている。その他、高校生に教えることの大変さを書いた人もあった。

表6-1-1 参加高齢者の事前調査結果

氏名	I. I	I. I (副会長)	T. O	E. S	T. T
年齢	67歳	74歳	60歳	66歳	73歳
性別	男	男	女	女	女
地域の子どもの関わり	小学生、中学生、高校生と交流する機会があれば積極的に参加している。	挨拶をする。小学生、中学生、高校生と交流する機会があれば積極的に参加している。	時々、話をする。	時々、話をする。	挨拶をする。時々、話をする。小学生、中学生、高校生と交流する機会があれば積極的に参加している。
居住形態	離れて住む（静岡県内）	近隣に住む（徒歩圏）	同一家屋に同居している	離れて住む（静岡県内）、静大の学生が下宿している	離れて住む（静岡県内）
今の生活で大切にしていること、生きがい	地区社協の一員として地域の人と親しく交流すること	健康第一	家族、健康	健康第一、自分の生活をしっかり出来る様	健康に注意、老人会での交流、毎日、手芸をやっている。
交流するにあたり楽しみにしていること	人の話にどれ位、興味をしめすのか	亀のキーホルダー作り、竹とんぼ他わら細工等。でも、人に教えることが非常に大変だということを今年初めて経験しました	私の息子も結婚して家を出ているので、若い人と話をするのが、楽しみです。	身近にいないので、言葉使いが気になる	孫のやうな高校生がどの程度出来るか楽しみです

K. T	S. N	S. W (会長)	M. T	K. T
69歳	73歳	70歳	81歳	
女	女	女	女	女
挨拶をする。時々、話をする。小学生、中学生、高校生と交流する機会があれば積極的に参加している。	挨拶をする。時々、話をする。小学生、中学生、高校生と交流する機会があれば積極的に参加している。	挨拶をする。時々、話をする。	全くかかわりがない。(自分の孫との交流しかない)	
同一家屋に同居している	近隣に住む(徒歩圏)	同一敷地の別棟(離れ)に住む	同一家屋に同居している(高校生の孫がいる)	
家族の話し合い。菊の花を育てる事。	毎日が楽しく元気に生活できる事を考えています。友達との交流です。	人のためのボランティア(通院の手伝い)を実施しています。月2回、高齢者のつどいに参加しお手伝いをしております。		
日常生活の出来る様、気を付けています	孫のような気持であえる事を楽しみにしています。	若い方との交流により、会話、その他エネルギーを貰えそうです。こちらからもアドバイス等出きればとも思っております。		

3. 座談会から見る交流活動の意義

2回目の交流活動を終えた直後、座談会を設けて、交流活動の感想について話し合ってもらった。その内容を録音しておき、それをもとに交流活動の感想について分類をし、まとめた。

(1) 交流活動の準備について

- ・今回は準備が大変だった。(事前に自宅の竹を伐採して、竹とんぼの寸法に切りそろえるという準備をしてくれていた。)
- ・1時間しかないから、ある程度まで、準備して作っておかないと、(高校生には)できなかった。
- ・2回目はある程度、(生徒の作業の進み具合等の)様子が分かった。(2回目に、お手玉は小豆を入れ口を縫うところの前まで作ったものを準備していた。巾着は布端の始末としてロックミシンをかけた。)

(2) 授業の内容・生徒の様子について

- ・(1時間で完成できるように準備をしたつもりだったが、)今の高校生にとっては1時間では(完成させることは)難しい。1回目に2回目のようにある程度まで作っておけば完成したが、それでも中には1回目にも完成した子はいた。
- ・(グループ分けで作るものを決めたことについて)出席番号で割り振られると、不服な子もいたかもしれない。
- ・やる気のある子は後から、やっていた。(授業後に家などでやっていたようだ)
- ・男の子でも喜んでやっていた。家庭科を小学生の時から、男子もやっているから。
- ・運針が出来ない。指貫も知らない子がいた。びっくりしちゃった。返し縫いもしらない。
- ・運針を教えたほうがいいね。私たちも練習した。
- ・今は買っている。昔は、子供が学校にあがるときに、作った。今はお母さんもやらない。
- ・S高の生徒さんたちは、ほんとに素直で、いいお子さんたちだった。
- ・同じ視線で何かを一緒にやるというのはいいね。

(3) 孫や地域の子どもたちとの関わりについて

- ・孫が、小学生の時は、よく(家へも)来るが、中学、高校生ぐらいになると、来なくなる。(中・高校生では)お小遣いがほしさに来る。
- ・男女差もある。女の子の方が来る。男の子の方がシャイなんだよね。
- ・大学生になると、東京に行ったりして、なかなか会えなくなってしまう。
- ・家の周りに小さい子供がいない。

- ・孫が遠くにいていて、家にいなくて、夏休みやお正月しか会えないしね。
- ・近所の小学生や中学生が良く挨拶してくれる。

(4) 交流活動に協力することについて

- ・子供たちと接する機会を持てて、楽しかった。
- ・交わりを持つことは、いいことだね。
- ・いろいろな考えの人がいるので、〇小学校区の学校ならいいがという人も中にはいる。
(今回の活動は) 有志で参加してくれた。
- ・(地区社協の) 役員をしている人で、こういう活動を学区外でやることを好まない人がいた。でも何回かやっていけば、慣れてくる。活動を広げていった方がいい。
- ・(こういう活動を) またやってね。

(5) 考察

高校生の技術の低さに、とても驚いたことや高校生に作品を時間内に完成させるためには高齢者の予想を超える十分な準備が必要であり、準備が大変だったことが分かった。しかし、高校生と接する機会を持てて、楽しい時間を過ごせたようだった。事前調査で地域の子どもたちとも何らかの関わりがあることが分かったが、それでも接する機会がなかなかなく、もっと関わっていきたいと感じているようだ。交流活動は高齢者にとってもあまり経験のないことで、戸惑いもあったようだが、実際にやってみると高校生と楽しく交流できて、とても良かったという感想が出されていたため、回数を重ねていくうちに少しずつ交流を広めていくことができるのではないかと考える。座談会を行ったことで、高齢者が高校生の実態や現実を知り、驚きなどの本音が出て感想文も書きやすくなったのではないと思われる。学校では、ゆっくりと聞けない感想も聞くことができ、座談会を行った会場も地区社協の方が良く行く店だということで、いつもと変わらない自然な感じで、話してもらうことができたと思われる。

4. 座談会直後の感想文からみる交流活動の意義 (写真 6-1-1)

交流活動について感想文を書いてもらい、交流活動についてどのように感じているか考察することとした。書くのは苦手という声があったため、3で述べた座談会を先に行った後、感想を書いてもらうことにしたためか、比較的多く書いてもらうことができたと思われる。感想文を表にまとめた。(表 6-1-2)

(1) 高校生の様子について

高校生に対する良い印象について、7名の記述が見られた。その中で最も多かったのが「やさしい子供さんが多いなと思いました。」など素直、優しいという記述で4名見られた。そして、「物を縫う経験がない男女の生徒さんがまじめに取り組んで下さった姿に、今とかく荒れて居る世の中のことを思う時、とても救われた思いが致しました。」など一生懸命頑張って取り組んでいる様子について3名、「男の生徒さんの方が良く出来たのにはびっくりしました。」などと男子の活動の様子について2名、「やはり手先の器用な子供もいて、なかなかだなと思いました。」など器用に作る生徒について2名となっている。

また高校生の技術の低さについての記述も6名だった。「今日、生徒に聞いてみました。小学生の頃、模型飛行機など作った事があるかね。ないです。の答。何もかも初めてでは無理もないですね。生徒に作らせるのは、無理。8~9分通り自宅で作ってきて正解と思いました。」「巾着の担当をしましたが、運針の基礎や糸の止め玉を作る事さえなかなか大変という事がわかり、家庭での教育のしっかり出来ていない状態で学校教育の大変さが分かりました。」「竹とんぼ作りを行いました。高校生自身、自分で作る事の難かしさがある程度、実感してもらえたと思う。」などという記述が見られ、そのほとんどが裁縫ができないなど、高校生がものづくりを上手くできないことについての驚きが書かれていた。

(2) 交流活動についての感想

交流活動をして、楽しかったと書いている人が4名だった。「みんな楽しく出来たと思います。私達も孫と1時間過ごさせて頂き有難く思います。」「自然に手を動かしているのに、心から驚いた様に『わあ、すごい。はやい。うまい。』と云われると久しぶりに私も真剣になり、楽しくなっていました。」などと高校生と交流して楽しくできたことが書かれていた。さらに「もっと会話をして色々な事を話したかった。中途半端で終わったように思います。」「楽しかったので又時間を作ってやって下さい。」など、もっと話がしたかった、またやりたいという記述が4名だった。「亀さんの飾りをにわか先生で教えましたが、6人以上が2個作り満足そう。私達もよかったなと思います。」など作品ができ生徒が喜んでいたりそれを見て、うれしく思う、良かったなと思う。と書いている人も4名いた。さらに「1日目はどうなることかと心配しましたが、2日目は気持ちの上でもリラックスして楽しく作業が出来ました。」と初めは心配があったことについての記述も2名見られた。その他に「最後の別れに『おばあちゃんありがとう』この一言にぐっときました。」「今の高校生と視線を同じにして顔を合わせ、ひとつの事に一生懸命汗をかきながら、作るのは、とても素晴らしいと感じました。」という感想も見られた。

(3) 考察

交流活動を通して、高齢者は高校生と実際に接してみると、思ったより素直だった、一生懸命だったという感想があったことから、高校生に好感を持てたことが分かる。さらに高校生の不器用さなど、高校生の実態や現実を知ることができた。1日目は高校生と関わることに心配があったようだが、2回目を終えて、楽しくできた、またやりたいという感想もみられた。

また作品を完成できて生徒が喜んでいる様子にうれしくなったと書いている人もおり、役に立ったという充実感を感じているようである。これは、高校生の実態を知った上で、高校生が作品を完成できるようにと考え、そのため準備を十分にしたことによると考えられる。

第2節 高齢者にとっての交流活動の意義

交流活動に参加してもらった高齢者は比較的若く、趣味などで普段から生き生きとした生活を送っている人たちが中心である。地域の子どもたちとも何らかの関わりをもっているが、もっと関わりたいと思っている。関わるまでは、高校生の様子が分からず、心配もあったようだが、交流活動を行い、実際に高校生と関わることで、素直さや一生懸命な姿から高校生に好感をもち、楽しい時間を過ごすことができた。さらに不器用さなど、高校生の実態について知り、2回目には、さらに十分準備をし、生徒が喜んでいる様子に充実感を感じている人もいた。事前調査の生きがいの1つといえるのではないだろうか。準備も含め、教える時にも、非常に熱心に取り組んでくれた。これは、学習内容に高齢者の得意とするものを取り入れたため、それが高齢者にとって励みになったのではないかと思われる。

個人のレベルで見ると、E. Sは、事前調査で交流をするにあたり楽しみにしていることについて「身近にいないので、言葉使いが気になる」と書き、高校生に対してあまり良い印象を持っていなかったようであるが、感想文では「このような機会を得て、久しぶりに高校に行き、孫より年上の高校生に接し、やさしい子供さんが多いなと思いました。」と書いている。交流活動を通して、高校生に対して好感をもつことができたためと思われる。また事前調査では「人に教えることが非常に大変だということを今年初めて経験しました」と書いていた。I. Iは、感想文で「高校生自身、自分で作る事の難かしさがある程度、実感してもらえたと思う。」と書いている。今回の交流活動では、教えたいことが伝えられたのではないかと思われる。T. Tは事前調査で「孫のような高校生がどの程度出来るか楽しみです」と書いていたが、感想文では「1回目の時より大分、自分から縫い始め、出来上がると喜んで次の作業にかかり手際よくなったと思います。家に祖母がいる方は針を持つのも上手に出来るようです。」と高校生の手際が良くなったことに気がつくなど、高校生がどれだけ出来るかをしっかりと把握している。さらに「私達も孫と1時間過ごさせて頂き有難く思います。」と孫と過ごすような楽しい時間を持てたようだ。このように個人のレベルでも、交流活動を通して、それぞれが、とても充実した時間をもてたようである。

第7章 結 論

1. 本研究で求めたもの

今日の少子高齢社会の進展を反映して、1980年代の後半以降、家庭科の教科内容において大きくとりあげられるようになったのが、「高齢者の生活と福祉」の学習である。1999（平成11）年版高等学校学習指導要領では、「高齢者の生活と福祉」は、必修選択科目の1つ「家庭総合」（4単位）において、1つの章として位置づけられている。

しかし、90年代の「高齢者の生活と福祉」に関する授業実践報告を見ると、日常生活では生徒が高齢者と接する経験が少なくなっていることなどから、高齢期について知識としては理解できても、自分の問題として把握しにくいなど、指導上の困難が多々あることが指摘されている。また高校生の高齢者に対する関心を高めるために、様々な体験活動が実施されているが、疑似体験や1回限りのイベント的なものが多く、どのような体験活動を行うかについての検討が必要である。

そこで本研究では、高等学校家庭科における題材「高齢者の生活と福祉」の学習に関わらせて異世代の1つである高齢者との交流活動を独自に企画し、実施することにした。そして、このような異世代交流活動を行うことが、「高齢者の生活と福祉」の学習にとって、どのような意義があるのかについて明らかにすることを目的とした。

まず過去10年間の家庭科教育関係雑誌（2種）に掲載された実践報告を収集、分析し、家庭科に関連する既存の異世代交流活動の動向を明らかにした。これらを踏まえ、高齢者と高校生との交流活動を企画、実施した。そして、その交流活動が「高齢者の生活と福祉」の学習を深めることに、どのような意義をもったかについて、高校生とともに、高齢者の立場からも検討した。

高校生については、高齢者に関心を持ち、学習の深まりがあるかどうかを、日常生活での高齢者との関わりや意識についての事前・事後調査や交流活動直後の感想文、授業中のワークシートや題材学習後の感想文を資料として収集した。これらの結果をもとに、1学級集団としてだけではなく、1人1人にとっての学習の深まりを分析、考察していく。学習の深まりを把握するために、以上の資料について、2通りの分析方法を設定した。1つは交流活動直後の感想文の記述内容に注目し、検討すること、2つ目は事前・事後調査や感想文の記述内容について、現行の指導要録における「家庭」の4つの評価の観点を活用して、交流活動によって得たものについて、高齢者についての知識にとどまらない、関心や意欲、思考の深まり、そして技能的な面に注目して、検討した。高校生個々人の学習の深まりでは、収集したすべての資料を用い、1人1人の交流活動の事前から、事後、題材学習後までの変化を明らかにしていくこととした。また高齢者にとっての交流活動の意義については、交流活動の事前に行う調査や交流活動直後に行った座談会の記録、その後の交流活動についての感想文を資料として収集し、検討した。これらの結果を踏まえて、交流活動の意義と課題について考察することとした。

2. 本研究で明らかになったこと

(1) 既存の家庭科教師による異世代交流活動実践の検討(第2章)

家庭科教師による異世代交流活動の報告数は、2002年、2003年に最も多い。これは1999年(高等学校)、1998年(小・中学校)新学習指導要領に、さまざまな世代の人との交流の機会を設けることが示されたことが影響している。実施教科については、2002年や2003年あたりでは、家庭科ばかりではなく、総合的学習の時間というものも多い。領域では、保育・高齢者・食生活の領域の交流実践が多い。交流相手については、専門家との交流が最も多い傾向にあり、次いで乳幼児、高齢者となっている。これらの異世代交流活動の実践では、1回限りの行事として行う場合がほとんどで、継続的に同一の相手と交流をしたり、家庭科と総合的な学習の時間と関連させて行った報告は、ほとんど見られなかった。

「高齢者との交流活動を取り入れた実践については、27篇あったが、希望者など一部の生徒のみが交流を行った実践を除くと、21編であった。さらに高等学校の普通教科家庭科で実践されたものは10編となり、実践することがなかなか困難であることが分かる。そのうち高齢者にインタビューを授業外の課題として行ったものが4編、高齢者福祉施設の訪問が6編であり、この2つが主流であることが分かった。

(2) 異世代交流活動と題材「高齢者の生活と福祉」の概要(第3章)

本研究で実施した異世代交流活動は、筆者の所属する研究室で、4年前から交流を続けている〇学区地区社会福祉推進協議会のスタッフを中心とした地元の高齢者に協力をお願いして、交流活動は、彼らと相談しつつ進めた。高齢者に高等学校へ来てもらい、1クラスを対象に、高校生8名の各グループに1、2名の高齢者が、高校生に生活文化に関わることで高齢者の得意とするものを教えるという活動内容とした。作った物は、布で作る花、竹とんぼ、お手玉、巾着袋、亀のキーホルダーの5種である。交流活動は2週間の期間をあげて2回行った。

第1回目の交流活動では、1時間で完成できるようにと高齢者が事前に材料を準備したが、高校生のほとんどが完成できなかったため、高齢者は、とても驚いていた。そして2回目には、高校生が時間の中で完成できるようにと高齢者は1回目よりさらに事前の準備に力を入れてくれた。その結果、多くの高校生は完成させることが出来た。その他、高齢者からのプレゼントもあり、高校生はとても喜んでいて。

次に、以上の交流活動に続けて実施された題材「高齢者の生活と福祉」の授業の概要については以下の通りである。今回の授業は、静岡市立S高等学校の矢代哲子教諭によって計画実施された。ビデオやプリントを用いた学習で、おもに高齢者の身体的特徴だけでなく心理的な特徴、福祉政策の現状、様々な高齢者の実態についてとりあげている。高齢者の抱える問題点を学んでいく中で、高齢者について理解を深め、高齢者とのように関わっていったらよいか、高齢期をどう生きたいかを考えることができるようにしている。

(3) 集団としてみた高校生の異世代交流活動による学習の深まり (第4章)

事前調査によって明らかになった高校生の高齢者との関わりの実態は、祖父母と同居しているものが約3割で、近所に住む地域の高齢者との関わりは、3割の生徒は挨拶をすることもなく、話をすることがない生徒が5割を超えていた。そして挨拶を良くするものは2割で、話を良くするものはわずか5%だった。高齢者から何かを覚えてもらうことについてはすべての生徒がしないと答えていた。学校における高齢者との交流の経験としては、高齢者を学校に招待した経験のある人と学校から老人ホーム等の施設に訪問した人がそれぞれ約4割であった。以上のことから、対象とした高校生の7割は、日常的な高齢者との関わりを持っていないことが分かった。

次に、事前調査と事後調査の結果から高齢者に対する意識の変化を見ると、「高齢者への親しみを感じる」「高齢者からもっと話を聞きたい」については、「そう思う」「少しそう思う」を合わせると事前調査で3割程度だったのが、事後調査では7割まで上昇した。「高齢者と話をしているのが楽しい」「高齢者と自然に話ができる」「高齢者に色々なことを教えてほしい」についても事前調査では5割程度だったのが、事後調査では7割に増加した。今回の交流活動によって、高齢者に対する親しみを感じたり、積極的に関わろうとするものが増加している。

そして、活動直後の感想文からみる交流活動の意義については、交流活動直後の生徒の感想文の記述内容から「高齢者について」「高齢者の教え方について」「教わった内容について」「交流活動についての生徒自身の思い」の4つに分類された。1回目には、最も多かったのが「高齢者について」次いで「高齢者の教え方について」「教わった内容について」「交流活動についての生徒自身の思い」の順であった。それが2回目には、「交流活動についての生徒自身の思い」が最も多くなり、次いで「高齢者について」「教わった内容について」の順である。1回目には、高齢者についての感想が多かったが、2回目になると、交流活動についての思いや高齢者と関わってみて感じたことについての感想が多くなっていた。

さらに、交流活動とそれに続けた題材「高齢者の生活と福祉」の授業を通して注目した、観点別評価による「高齢者の生活と福祉」の学習の深まりについての検討においては、高校生の感想文等を「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4つの評価の観点について独自に次のような評価の視点を立てて、検討した。

「意欲・関心・態度」：①高齢者の心身の特徴と生活に関心を持ち、肯定的に捉えている。高齢期を自分の問題として考えようとしている。②高齢者との関わり方について考えようとしている。

「思考・判断」：高齢者を援助の対象としてではなく、生活主体の個人として捉え①高齢者の心身の特徴の一般的な変化と個人差に気づき、高齢者の生活の実態と課題について具体的に考えを深めている。②高齢社会の現状や課題、福祉サービス、高齢者の自立生活の支援のあり方について具体的に考えを深めている。

「技能・表現」：①高齢者との交流を通して、高齢者の心身の特徴、高齢者の生活につい

て表現することができる。②高齢者とのふれあいを深め、適切に関わることができる。

「知識・理解」：①高齢者の心身の特徴や高齢者の生活、高齢者福祉サービスを理解している。②高齢者との関わり方について理解している。

事前調査時では、「関心・意欲・態度」の①と②に注目した。①に該当する記述があったのが、22名だった。自分の知らないことを知っているというような記述が多い。「関心・意欲・態度」の②に該当する高齢者との関わり方に関する記述は8名に見られた。

次に、交流活動の1回目、2回目、事後調査時、学習後の感想文の記述について、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4観点において、検討した。まず、交流活動1回目では、「関心・意欲・態度」の①に該当する記述が最も多く、次いで「技能・表現」の①、「知識・理解」の①という結果となった。ほとんどの生徒が高齢者に対して関心を持ち、肯定的に捉えることができたことが分かった。交流活動の2回目でも同様に、「関心・意欲・態度」の①に該当する記述が最も多く、次いで「技能・表現」の①、「知識・理解」の①となった。しかし、1回目と比べ、2回目は、「技能」の②が大きく増加し、高齢者との関わり方を身につけている。事後調査時の交流活動についての感想では、「関心・意欲・態度」の①が最も多く、次いで「知識・理解」の①、「技能・表現」の①となり、「知識・理解」の②、「思考・判断」の①では増加した。学習後の感想文では、「関心・意欲・態度」の①が最も多く、次いで、「知識・理解」の①となっている。また「思考・判断」の①と②、「知識・理解」の②が大きく増加した。

すべてを比較してみると、「関心・意欲・態度」①では1回目の交流活動の感想文に最も多く、「技能・表現」①と「技能・表現」②では、2回目の交流活動で最も多かった。「関心・意欲・態度」の②、「思考・判断」の①と「思考・判断」の②、「知識・理解」①と「知識・理解」②で、最も多いのが、学習後の感想文となっている。また「思考・判断」は、学習後の感想文以外の時点には、ほとんど見られなかった。

ほぼ全員の生徒が交流活動をすることにより、高齢者の心身の特徴や高齢者の生活について関心を持ち、高齢者を肯定的にとらえることができたといえる。そして、交流活動を2回行ったことで、高齢者と話をしたり、共に活動することを通して、高齢者との交流を深め、高齢者と関わることにしても関心を持ち、高齢者との関わり方について学ぶことができたと思われる。そして交流活動やその後の学習の中で、様々な生き方をしている高齢者のついでや高齢者を取り巻く環境について学ぶことで、高齢者についてや自分たちが高齢者とのように関わっていったら良いかなど、高齢者に関する学習についての理解が深まったと思われる。さらに高齢期をライフサイクルの中の1つとして考え、高齢者を生活主体の個人として捉え、自分の理想の高齢期について考えたり、高齢者と自分たち若い世代との交流の重要性に気づくことができた。そして、題材学習後の感想について、「関心・意欲・態度」についての記述を書いている39名のうち21名が交流活動に関する記述（「技術・表現」の①と②）についても書いている。「思考・判断」については25名中16名いた。

「知識・理解」は37名中18名であった。「技術・表現」に該当する記述が見られる生徒は

21名であり、高齢者と実際に交流したときのことを振り返ることができている。これらにより、交流活動が「関心」や「技能」の面のみならず、「思考」や「知識」の面にも影響があったと考える。

(4) 個人の変化からみた高校生の異世代交流活動による学習の深まり(第5章)

第5章では、第4章でみた学習の深まりについて、高校生個人の変化に注目した。ここでは以下のような特徴的な事例が認められた。高齢者と関わるのがほとんどなく、高齢者に関心がなかった生徒が、交流活動をしたことで、高齢者に関心を持ち、肯定的にとらえ、高齢者理解を深めた。祖父母以外の高齢者と接したことがほとんどない生徒が、自分たちと高齢者とが関わることの必要性に気づき、お互い理解しあうことの大切さについて考えた。祖父母と同居しているが、高齢者と関わることには関心があまりなかった生徒が、高齢者との交流で、高齢者を肯定的にとらえ、関心を持ち、高齢者と共に生きる姿勢が培われた。高齢者とほとんどかかわりが無い生徒は、様々な高齢者についての実態を学習した後で、交流した元気な高齢者を思い出し、そのように趣味や生きがいを持ち、生き生きと高齢期を過ごしたいと自分の高齢期について考えを深めることができた。また近隣に祖父母が住んでいて普段から関わりがあり、地域の高齢者とも他の生徒に比べ比較的関わりが多い生徒でも、交流活動をしたことで、日常生活の中では、ゆっくり話をしたことがないことを自覚するとともに、今後は高齢者に自分から積極的に関わろうと意欲まで示している。そして高齢者とどう接していけば良いかを考え、理解している。このように事前の段階で高齢者に関する理解や関心が違っても、1人1人が高齢者の学習に意欲的に取り組み、高齢期について考えたり、知識や技能を身につけたりしている。

(5) 高齢者にとっての交流活動の意義(第6章)

第6章では高齢者にとっての交流活動の意義について考察した。事前調査から、参加高齢者の年齢をみると、前期高齢者が中心となっており、地域の子どもたちとも何らかの関わりがある人が多い。交流活動直後の座談会では、準備について、交流活動の内容・生徒の様子について、子どもたちとの関わりについて、交流活動に協力することについての話題が出された。またその後に書かれた感想文では、高校生の様子について、まず良い印象として、「素直、優しい」「一生懸命頑張っていて取り組んでいる」などという記述や高校生の不器用さについての記述が多く見られた。高校生に好感をもち、高校生の現状を知ることができていた。交流活動についての感想文では、「楽しかった」「またやりたい」「生徒が喜んでいるのを見て、うれしく思った」などという記述が見られた。交流活動では、事前の準備が大変だったと思われるが、充実した時間を過ごし、やりがいを感じたなど、高齢者にとっての生きがいになることも分かった。

3. 「高齢者の生活と福祉」の学習の中で、異世代交流活動を取り入れる意義と課題

得られた結果から、交流活動を行ったことで、高校生は、まず高齢者に対する関心が深まり、高齢者の心身の特徴や生活についての知識が得られ、さらに 2 回の交流活動で、高齢者と関わることに関心を持ち、高齢者との関わり方を身につけたことが明らかになった。そして、その後の題材「高齢者の生活と福祉」の授業に意欲をもって取り組むことが出来、様々な高齢者の生き方などの実態を知ることができた。高齢者と自分たちとの関わりについても理解した。高齢者を生活主体の個人として考えることで、高齢期を自分の問題として考えることができた。学習後の感想文から、再び交流した高齢者について振り返りながら、自分の高齢期についてや高齢者を取り巻く環境について考えを深め、快適な高齢期の追及するところまで至っていた。

家庭科担当の矢代哲子教諭の話によると、交流活動後、生徒は交流活動で作った作品を生徒同士で見せあったり、遊んだりする姿が良く見られたそうである。また交流活動後の「高齢者の生活と福祉」の学習でも、授業中の生徒の態度について、いつもは真剣にビデオをみたり、学習に取り組むことができない生徒も、今回の高齢者の学習では、ビデオ学習などの時も真面目に取り組み、ビデオを集中して見ていたという。また、学習後の感想文についても他のクラスと比べて、全体的に記述量が多かったということである。

高齢者にとっての交流活動の意義としては、高齢者にとっても高校生との交流活動は、高校生の実態を知ることであり、お互いの理解を深めることにつながった。そして、このような交流活動は、高齢者にとって生きがいの 1 つとなっている。このことは当然ながら、交流相手である高校生に直接伝わり、高校生が生き生きとした高齢者像をもつことにつながる。これからの高齢社会の中で高齢者も社会に積極的に参加し、生きがいを持って生活することが理想であり、同時に異世代で理解しあい、共に生きていこうとすることが大切である。交流活動が広がることで、これらのことが実現されるであろう。

渡瀬によると、家庭科教師を対象に行った調査から、教師が高齢者関連学習の際に苦心に思うこととして、「生徒への学習内容の動機付け」について 7 割、「実習・見学実施施設の選択と準備」については 6 割があげているということである。そして家庭科の必修科目内での体験的学習による高齢者関連学習の実施率は 2 割程度、実施していなかった家庭科教師のうち 7 割程度は体験的学習を導入したいと考えているものの、実習に当てるための授業時間の不足によって実施できていない状況であるという。

本研究のような交流活動は、学校の活動の中では、なかなか実践がなされない。それは、教師が適切な交流相手を見つけ、時間割など調整することが難しいからだと思われる。今回の交流活動では、地区社会福祉推進協議会のスタッフに協力をお願いした。地区社会福祉推進協議会は、小学校区ごとに設置される地域住民の中での助け合いを育てている組織である。2005 年の現在、旧静岡市でも、設置予定数が 54 のうち、47 が設置されている²⁾。ふれあい交流会や講演会、子育て支援など活動は多岐にわたり、高齢者に対しても介護保険を利用している人ばかりでなく、自宅に閉じ困りがちな高齢者の生きがいづくり、介護

予防を目的にディサービスも行っている。元気な高齢者がスタッフとして活躍したりとさまざまな高齢者が組織に関わっている。また介護保険制度の改正で2006年度から地域密着型介護サービスが新設され、小規模多機能型居宅介護（小規模多機能ホーム）が今後増加してくると予想される。地域密着型介護サービスについては、新聞記事を巻末資料とした。これらは、地域との関わりが深く、学校にも近いため、協力も求めやすいだろう。これからは、このような組織と連携していくことにより、交流活動が広まっていくことも考えられる。そして、交流をするにあたり、高齢者のことも、生徒のことも事前にある程度把握し、交流内容を検討しなければ、お互いに有意義な交流活動は実現できない。交流活動に関わる教師や高齢者の代表者などが事前に話しあうことは、当然必要であるが、交流がスムーズに行えるように、相談したり、調整したりできる専門家がいれば、もっと交流活動が実践されるようになると思われる。例えば社会福祉協議会、NPO法人などに協力を求めて、交流活動の企画に参加してもらうことで、交流内容を検討することができ、それによって両世代がお互いの理解を深められるような意義のある交流活動をすることができるだろう。

本研究では、2回交流活動を行い、交流が深まることが分かったが、このように何回も交流活動を行う場合、普通科目家庭科では、授業時間数の削減の中で実施できない現状がある。そこで総合的学習の時間の中で交流活動を継続的に行うことが考えられる。家庭科教師による報告(第2章参照)でも、総合的学習の時間に家庭科教師が関わっている報告が見られる。交流活動を家庭科の授業で実施できなくても、総合的な学習の時間で交流活動を行い、家庭科の授業と関わらせることで、家庭科の学習はもちろんのこと総合的な学習の時間の学びも深まると考える。

そして交流活動を行うにあたり、高校生、高齢者の両世代とともに、不安や心配があったことが分かった。そこで高校生の場合は、事前に高齢者とのコミュニケーションの取り方について学習しておくことで不安が減少するのではないと思われる。また高齢者も準備の段階で高校生の実態が分かればもっと良かっただろう。福祉教育における学校と施設の関係について、山本は「双方向」の関係を構築するためには、「教員・施設職員・生徒・利用者」がそれぞれの立場で主体性を持つ関係をめざさなくてはならないとしている³⁾。これは地域の高齢者と生徒との交流活動にもいえることであり、高齢者の代表者や教師だけが主体的に関係を持つのではなく、生徒や参加する高齢者1人1人が主体的に活動に関わる必要がある。そこで生徒と地域の高齢者が話し合っ、交流活動を企画することも交流活動を行う上で大切になるだろう。今回の交流活動では、筆者らが仲介役となり、高齢者の代表者、矢代哲子教諭とそれぞれに話し合いをもって交流活動を企画した。そして高齢者の代表の呼びかけによって、参加してくれた高齢者1人1人が交流活動に主体的に取り組むことが実現した。さらに交流活動後に、参加してくれた高齢者1人1人に対して、交流活動の様子を写した写真や生徒の感想を渡したところ大変喜んでもらった。やはり生徒がどのように感じたかをとても知りたかったということである。今回の交流活動では、高校生より高齢者が主体的に活動に参加してくれた。しかし、双方向の関係を構築す

るためには、もっと生徒自身が交流活動に対して、問題意識を持って取り組む必要があり、交流活動後にも自分たちの感想を直接高齢者に伝えたり、高齢者の感想を聞く場面があれば良かったのではないだろうか。自分たちがまとめたことを発表し、そこに高齢者にも参加してもらい、高齢者の感想を高校生が聞いたり、知る機会があれば、交流活動を振り返り、お互いの理解がさらに深まったであろう。今回の交流活動は題材「高齢者の生活と福祉」の授業とつなげることで理解が深まったと思われる。ただし今回の交流活動について、その後の「高齢者の生活と福祉」の学習の中では、一切触れていない（交流活動を実施できたクラスが1クラスに限られたため）。交流活動を振り返り、さらに高齢者について関心をもって、理解を深めることができるようするためにも、題材「高齢者の生活と福祉」の授業において交流活動についてのまとめをしたり、班で話し合ったりすることができれば、もっと良かったと思われる。また、高校生が自発的に高齢者にお礼の手紙を書こうと意欲を持つことができれば、さらに良かっただろう。

これらの学習を進める上で、個人の学習の過程が記録できるポートフォリオを活用することが有効だと考える。交流活動を行う前から、題材の学習後までの記録をファイルに残していくことで、振り返りもしやすくなる。交流活動の前に自分の目標などを書き記したり、交流活動中の様子を写真や感想文をまとめたり、参加高齢者の感想や自己評価を載せたり、学習のプリントをまとめたり、交流活動についてまとめたことを発表する機会を設ければ、教師の指導だけではなく、生徒同士での話し合いを取り入れることもでき、それらもポートフォリオに加えることで、さらに学習が深まっていくだろう。

今回行った交流活動により、高校生が「高齢者の生活と福祉」の学習に関心をもち、学習の深まりが見られ、高齢者にとっても生きがいの1つとなることが明らかになった。またお互いの世代についての理解が深まったことは大変意義があることだと考える。交流活動をおこなう時には、初めはとまどいがあるが、何回かやっていくうちに慣れてくる。これは2回目の交流活動の高校生と高齢者との感想文からも認められた。今後さらに交流活動に対する理解が得られ、交流活動が広まっていけば、お互いの世代の理解が深まり、共に生きていくという姿勢が培われていくだろう。

註・引用文献

- 1) 渡瀬典子「高等学校における高齢者学習実践の研究(第1報)―家庭科・公民科教師の捉える高齢者学習のねらい―」『年報・家庭科教育研究 第26集』pp.8-19 および「高等学校における高齢者学習実践の研究(第2報)―家庭一般・体験的学習の実践状況から―」『年報・家庭科教育研究 第26集』pp.20-28 2000. 10
- 2) 静岡市「静岡市地域福祉計画」2005. 3
- 3) 山本浩史「福祉教育における学校と高齢者福祉施設の主体的・協働関係について」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 Vol.9 地域を創る福祉教育・ボランティア学習』pp.180-201 2004

参考資料

- 1) 田中耕治「新しい教育評価の理論と方法 第Ⅱ巻 教科・総合学習篇」株式会社日本標準 2002
- 2) 加藤幸次「総合学習に活かすポートフォリオ評価の実際」株式会社金子書房 2001